

350
785

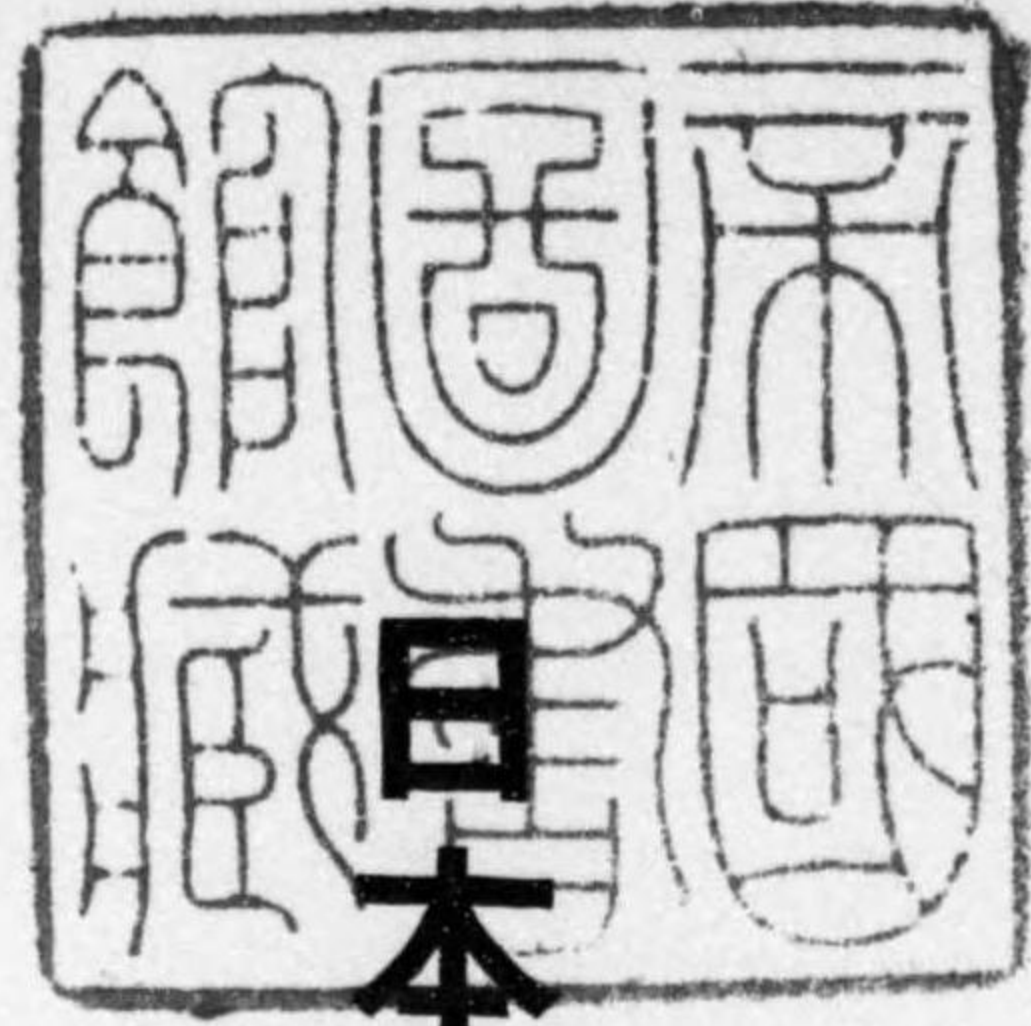
本日財界に輝く
泉 州 健 兒
原 静 村 著



始



特208
709



日本の財界に輝く泉州健兒



卷 頭 謝 辭

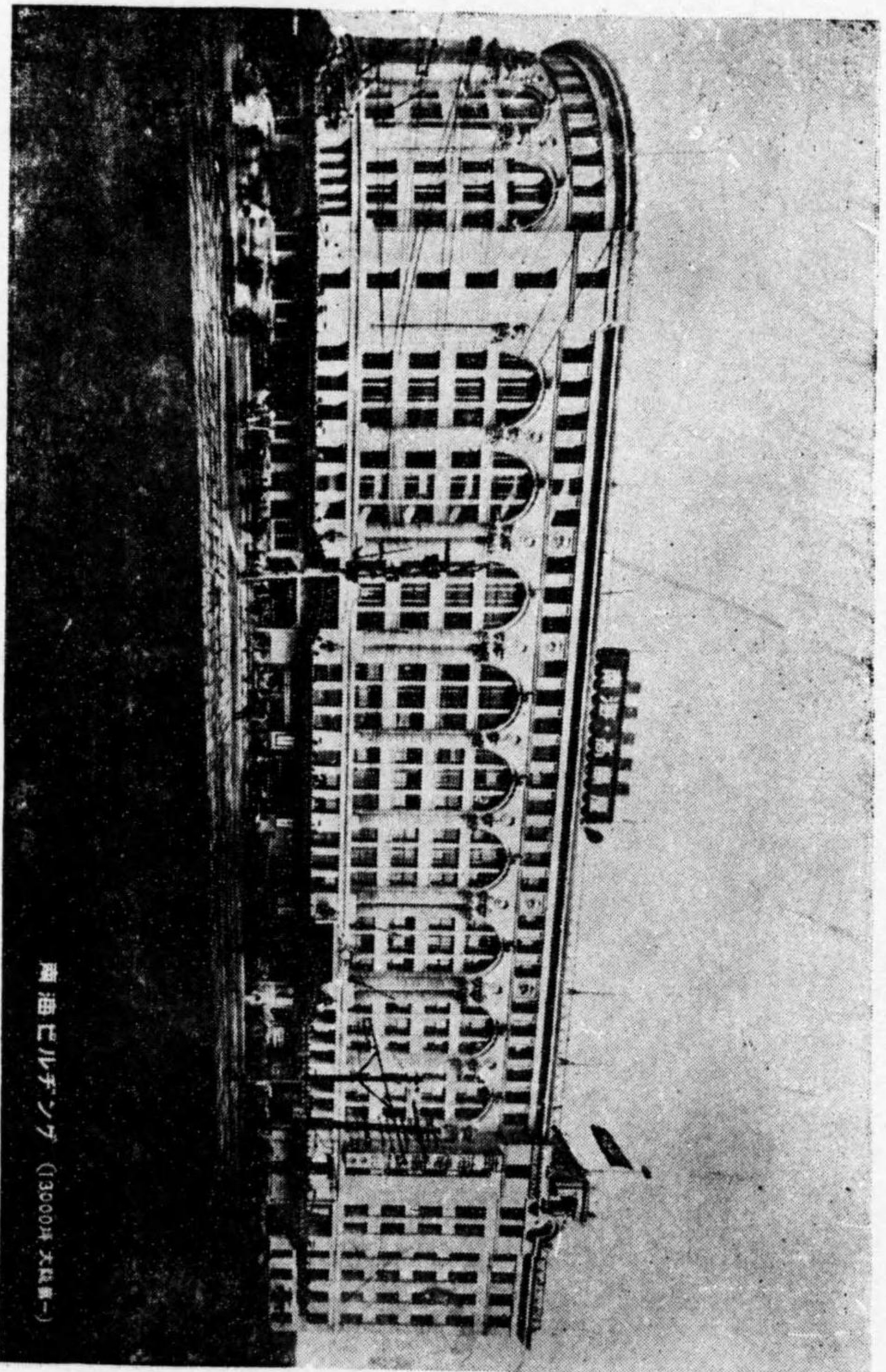
凡そ人物月旦ほど難ケしいものはなからう、褒め過ぎても貶しぎても變なものになる。殊に僅か短時日に書きあげたもの充分に材を蒐め得ず、的をづれた妄評も多からう事と信ずる平に御容赦を乞ふ。寺田君の人物評は既に先輩諸氏が各金玉の文あり、何れもあやめと咲き亂れ、文章を修めず、文字を知らぬ私の人物月旦の如きは固より人に示すべきものにあらざる事は私も識つて居る。唯本文は泉州健兒が日本の財界に於て如何に活動してゐるといふ事だけ知つて載けば私の幸慶とする所である。

著

者



寺 甚 田 吉 君



南海ビルディング (3000坪 大規模)

射放りよ驛波難は街華繁の一唯阪大り當に心中の市阪大は驛波難海南
グンゾルビ海南
十九口間 るあに所るさで出を分敷歩徒は橋齋心 前日千 堀頓道てし
るあで依一第阪大は全完の備設大擴の私面の其坪〇〇〇三一坪延間六

持法
 時下博學名之身
 會如亦康之志也
 不知中法也
 今回香山可寄小深
 遠無窮心之安
 總作之具取之猶
 難辨如惠賜了和
 事增息智德之至地
 入感謝申上在空之
 則包親念之考賜宣如
 笑面經下友
 在不忘如之建康如
 檢如如也
 聖具
 高年山
 上之
 原持甘先生
 松木

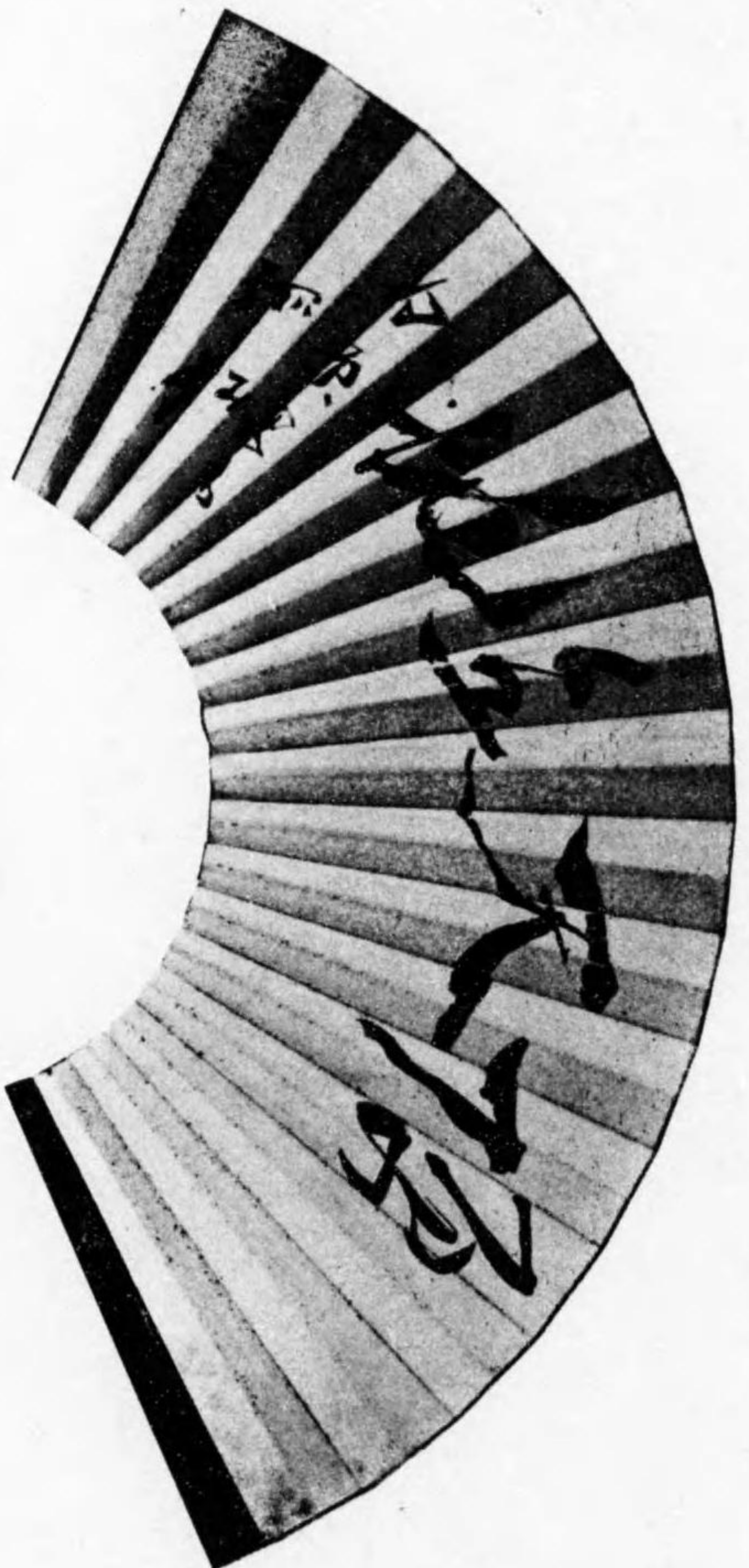
信音のへ者著りよ正僧大岡高長管宗言真義古

在經海峽を以て於て推遷を遂げ
て時明かにして漸に相傳へた
りしかば其意を以て其後

茶室

經海峽を以て於て推遷を遂げ
て時明かにして漸に相傳へた
りしかば其意を以て其後
の遺書中にも
敬而して之を以て其禮を
たして之を以て其禮を
且終竟に於て其禮を
之を以て其禮を以て其禮を
解して之を以て其禮を
其書に於て其禮を以て其禮を
洵に其禮を以て其禮を
其書に於て其禮を以て其禮を
其書に於て其禮を以て其禮を

帝國大學名譽教授 法學博士 松波一仁先生著りへ書信



書しれらへ興へ者著日當選當長議 氏松國川濱 長議口議衆

著者の言葉

読んでこの一書を青年諸君と護國の幽魂にさゝげ併せて青年諸君に寄す。

青年諸君

邦家は今未曾有の國難に直面してゐる、全國民は等しく猛省すべきである

愛國の眞仁人は起てよ……

昭和維新の機會は今なり……

大和民族は速かにその腐傷を剔抉し芟除して吾等が國家の遠大なる理想の實現に努め區々たる小争鬭を斷絶せなければならぬ。

昭和維新の好機は今……

錦旗を奉戴して人心革命を斷行すべき時なり。

醒よ人々

貴賤貧富老若男女の差別はない。

自己の爲めに國家の爲めに子孫萬代の爲めに延いては世界人類幸福の爲めに眞實の日本國家を作らねばならぬ。

青年諸君

皇天明示の眞理法に生くの機は熟せり錦旗を奉戴して一君萬民君民一家主義の實を擧げ上下一心億兆一體、眞に世界の精華たる君民合一一君萬民君臣一如を愈々益々強化せしめ人心革命を斷行すべき秋也。

我國の政治の墮落腐敗も社會の混乱窮狀が容易ならざる事態を招來する

恐れあり、然るに之を恢興收拾すべき術も力も無いまでに立ち到つた、この邦家の現状を座視するに憊びざる状態にあり。

國家は政治理想の本質を失ひ、民衆は凡て自己の立脚すべき大道を失つてその方途に轉迷しつゝあるに拘らず、而かも社會の大衆は擧げて之を覺らず偶々これを憂懼するものありと雖も大方禍の根源を正視明察するの能を缺除するか、或は各自身上の都合に餘儀なくせられて行詰れる邦家民心打開の術を回らすものなく、又時に估息的手段を講ずること雖も多くその徹底を缺き事績の擧がらざるところは蓋し理の當然である。

この國家社會の墮落、廢敗、暗黒、昏迷の情勢を徒らに經過推移せしめ、事態をこの儘に放任せんか、終には國家に恐るべき凶變の將來あること明白

である。

吾等は之を深慮するが故に奮然起たなければならぬ。

吾等はいくら自己に直接影響が無いから云ふて少しく社會上の出來に對して敏感にならなければならぬ、お互に自分等自身のことだ。

日本に於ける現今の政治でも宗教でも財政經濟でも乃至文化の程度でも一切の社會現象を有りさあらゆる方面から少しく冷靜に眺めて見ればそこに大和民族の日本、吾々日本人自身の國家が、その現状から將來に就て深刻に考へて見たならば決して凝こして居られない筈である。

徳富蘇峰氏はその近著の中で次の如き事を述べてゐる。

日本の今日の萎靡不振の狀勢は要するに國家的、國民的大理想を失へるに基因するものであつて、アメリカはドル帝國主義を眞ツ額に翳して一舉に世界を席捲せんとし、ロシアは共產主義の理想を掲げて世界に赤化の雄圖に進し支那においてすら三民主義の旗の下に自國の再建と對世界關係の改造とに一路邁進してゐるのに、此の間に在つて獨り日本のみ何等の國家的理想なきは心細き極みであり、此の際日本國民起死回生の一途は日本國體の尊貴獨特に目醒めて之を世界に光被せんを努力するのほかはないこと。

吾人は此の蘇峰氏の提説に多大の賛意を表せんことをするものである。

今日の日本が現在の如き萎靡不振興國の氣象を缺けることは蘇峰氏の正しく指摘するが如く國民がその理想を失へるためであつて、理想なき國民の萎靡せざるを得ざること、あたかも船に羅針盤なきが如きである。

而して此の國民的理想として氏が世界に特筆する我が國體の國際的發揮を
擇び來つたこともまた誠に正しい。

政治の墮落腐敗、社會の混亂は日本と云ふ大なる國家社會からしたならば
誠に泡沫にも等しいものである。

さりながら邦家の危急に對する共同責任を痛切に感じ慈に泣いて同胞に訴
ふるものである、されど吾等は自己の爲めに世に求むべき何物もない、たゞ
國運民命の歸趨する所を凝つて視詰めて來て最早我慢が出来ぬ。

斷崖絶壁の突端に歩を進めつゝ、而もそれを覺らざる瞽盲の日本民衆よ、座
視して憐れ亡滅の悶へ見るよりは若かず大聲叱呼して倒るまで戦はんにはご
こゝに書したはその血叫である。

今や我が日本人は世界的地位から謂ふならば、將に有色人種の盟主として
の大自然に立脚してやがては世界人類安寧幸福への曉鐘をつき鳴らさなけれ
ばならぬ大切な任務を持つてゐるのではないか。

青年諸君 人間が世に立つて個人としての成功と失敗、之れも輕視しては
ならぬ至重なる問題である。さりながら自己の生きる國家社會が滅亡的危機に
頻して居て、一身一家の富貴顯榮が何になるか、速かにその無明昏黒の暗よ
り醒めて、人の世の最高理想へ共に突進しやうではないか。

眞實に國を憂へ、大和民族に對して偽りなき慈悲心を有し愛國の爲め血を
燃すものは起て、日本をして亡國的危殆に陥るものは赤化左傾の世界的思潮
にあらず、社會主義にあらず、無政府共產主義にあらず、斯る片々たる跛行

思想は大國的正義の鎧袖一觸のみ。

吾等は進んで國家に多年醸生されたる虚偽と無稽の真相を明らかにせねばならぬ。速かにその色眼鏡をはづして、國家的重症の眞實情を正診、凝視せよ、日本は惱みつゝある病症は實に中樞神經の麻痺症とは、

曰く、國の立法府を組織する上下兩院に於ける議員の破廉耻、無能と我利我慾である。

曰く、官吏の無責任にして私利を營み、自己の職責を忘却したる祿盜的醜類の愈々多きを加ふること。

曰く、上皇室より特別の恩澤に浴する華族階級が大方は自己の大切なる地位と責任を忘却し醉生夢生的輩が充滿してゐる悲しむべき事實。

曰く、實業家又は事業家と稱する輩ら私利私福に汲々として眼中國家社會なく財界を顧みざること。

曰く、文教の府には一點晃々たる指導の方針なく昏乱錯雜その極に達せる思想の統一も取締も全く無能なること。

曰く、高等學府は公私立共に不統一紊亂せること。

曰く、人に安心立命を説くべき宗教々團は悉く腐敗墮落して最早有害無益の觀がある。

枚擧するさへその繁に堪へないが概ね斯の如き始末である。

内治上らず外交振はず財政乏しく民に生活難ありて、實業興らず上下交々利を貧ぼりて飽くことを知らず眞に餓狼の群と選ぶ所はない。

噫々我等の日本をして斯くまで混亂危態に陥らしめたこの病原菌が何れにあつたか之によつて明らかになつたであらう。

要するに吾等大和民族の光輝ある日本國家に、外部から侵入する幾多の黴菌がある、内部から發生する各種の毒素がある。

これぞ是れ邦家病弊の原因を作するのである、外來の黴菌は恐るべき繁殖力を以て侵蝕し内に發せる毒素は刻一刻その悪作用を發揮して止まぬ。内外相呼應して、この國を蠶毒してゐる。されど多くの同胞國民はこの國家國大難に向心づかぬ、何故に心づかないか。

それは恰も痴漢が毒酒に狂醉せるが如くこの恐るべき黴菌と毒素とに侵蝕されて、己に既に昏醉の状態に陥つてゐるからでないか。

眞實我等と憂を共にする熱血の同胞よ、日本現下の疾患は叙上の如く人の風上に起つ人々が口に高言を吐きながら、誠に國家觀念なく崇高絶對の大日本國家的信念の缺除してゐるこゝである。

而して一方未練の民衆が無自覺、無反省にもあやまれる彼等の甘言誘惑に引掛つた結果に外ならぬではないか、良藥は口に苦く、忠言耳に遡ふ、されど文王は言はずや『仁人は能く直練を受けて至情を悪まず』と

吾等は唯だ國を愛し、同胞の前途を杞憂するが爲に敢て直言するものである。

起てよ、而してこの非常時に赴かうではないか、この憂ふべき國家の危急を自ら救濟せんとするには果して如何なる方策を回らすべきか。

明治維新の元勳大西郷翁は偉人であつた、翁は

『生命もいらず、名もいらず、官位も金もいらぬ人間程始末におへぬものはない、然しかゝる始末におへぬ人間こそ眞に大きな仕事を爲すものである』
と喝破された、至言でないか。

熱血至誠の同胞よ我等の此所に提唱する、日本國家の非常時に際して。

眞實、生命もいらず名もいらず官位も金もいらぬ熱血赤誠の士が山川草澤に蹶起するこのみである。

我れこそと思はん人士は奮然として起てよ。

されど心事に一點の混濁があつては駄目だ、それぞ日本に昭和維新の大業を爲すべき卵子である。

烏合の衆團ならば百千萬あるも雖も蛆蟲の蠢動に終らんのみ。

青年諸君

鐘が鳴る。

鐘が鳴る。

奮然として起てよ、英雄出でよ、ぬツと立ち上つて非常時祖國を救へと曉鐘がけた、ましく乱打されてゐる。非常時國難とは何にか、英雄の出現を待望する民衆の関の聲である。

世を慨し國を憂へて山川沼澤に雌伏せる蛟龍の傑士は一擧にして奮起する
ここが刻下日本の最急務である。

青年諸君

鐘が鳴る。

鐘が鳴る。

私はこの人物待望の民衆の関の聲に應へるべく常に國家、社會正義の爲め健闘され國民の典型である士を傳評し以て青年諸君の處世に資する所以なるを思ひ遂に本書の刊行を企てたる所以の一なり。

然るに由來泉州人は協力團合の思想乏しく身を他府縣に寄する者は毫も郷里を顧みず而して在郷の士は郷土出身者の姓名をすら之れを知らむもの甚だ多く随つて其間殆ど交渉なく聯鎖なく協合なし、去れば又先輩と後進者との間も自然疎隔し之を他府縣人に於て見るが如き兩者の間に指導敬従の美風存せざるは私の常に遺憾とするなり。

茲に於て私は皆感ずるところあり泉州人互に相知り相知らるゝは團合和協を圖り愛郷的觀念を旺ならしめ以て泉州の發展に資す所以なるを思ひ他府縣に雄々しく活躍する泉州人を紹介なさんと欲するものなり。

復た現時青年子弟を目的とする立志傳成功談等に關する刊行物を見るに其多くは熱血氣銳の青年を煽動して一身を誤らしむるものならざる莫く、害多くして益少なきを慨して後進者をして自己の出所境遇志望に應じて執るべき經路を示さんご欲し其最も印象の深くして且つ感化力の強かるべき郷土出身の先輩を傳評して後進子弟の訓育に資する處あらんご欲し

『日本の財界に輝く泉州健兒』

ご題し寺田甚吉君の卷を刊行したるは本書刊行の所以である。

幸にして何等かの資するところあらば私の幸慶とするところである。

昭和十年菊秋薫る佳き日

原 静 村

著 者 の 言 葉 (其二)

西日本の富豪を語るもの、先づ指を必ず寺田家に屈す、而して當主寺田甚吉君が果して如何なる人物にして如何なる性格を備ふるかは、苟くも寺田家を知らんと欲するもの齊しく聞かんと欲するところにして、試みに之を縦より觀、將た横より、上より、下より觀て、所謂縦横無盡に論評するは極めて興味深かき事なるを信じ、則ち茲に吾人の眼に映じたる、天下の富豪寺田甚吉君を拉へ來りて、滿天下の人に縦横解剖の刃を下さんとする。現實に一億の富を有し、寺田家一門の總統領となり、威望二つながら兼ね備へたる、所謂我が財界の新人、天下の富豪寺田甚吉君は果して如何なる人物如何なる人乎

一言にして之れを盡せば、君は「富豪としてその本分を完全に盡し、財界新人としては非常時國家の爲めに心血を注いでゐる人なり」また先代甚與茂氏は創業の人にして甚吉君が守成の人である。

著者の言葉

(其三)

世の人を論ぜんとするもの、往々創業の人物に偏して守成の人を輕視せんとするの風がある。素より艱難刻苦自ら其荆棘を拓き、盤根錯節を排除して新に其業を創むること云ふことは最も至難の事に違ひはない。然れども彼等の境遇は單に現状維持を許さず、進取敢爲の止むなき原動力を以て居る。故に進めば取ること云ふ原則もあれば、亦艱難汝を玉にすること云ふ諺もあるのである。然るに守成の一方に至りては既に相當の地位に進み、如何に非凡なる才能手腕があつても夫れ以前の行程は到底經驗することは出来ぬ。言はゞ前者の原動力に對する惰力であつて、最早退歩の境遇に瀕して居る譯である。殊

に前者は目的を達すれば非常なる喝采を博し若し失敗に終ることも敢て己に損するところなく、世の人も亦之を非難するものもない、然るに後者にあつては進むも格別世の賞讃に値へずと雖も、一朝退かんか非難攻撃忽ち來る而已ならず、祖業を顧み家名を思ひ萬一の蹉跌を慮れば、時に或は意のある處を敢行する能はざる場合もある。故に古人も創業難きか、守成難きか、判断が出来ないこと云ひ。

山崎闇齋の如きは貧賤の家に生れたるものは何よりの幸福であると言つて居るのも、要するに此間の消息を説いたものである。然るに世人が往々守成の人を輕んずる風がある、近くは我が寺田甚吉君の如きは單に幸福な人であることの一言の下に品し去るものもあれば曩に某紙は君を以て「棚から牡丹餅

の落ちたやう仕合である」と品評して居るが如きは未だ此間の眞理を解せないもの、言と謂ふべきであらう。

甚吉君は天下の富豪、財界の巨人故寺田甚與茂氏の長男である。故に進取的氣象に乏しい、所謂棚から牡丹餅の落つるを待ち、不勞所得萬能と云ふ惰弱なる現代の人情から見れば、君が座して一億の富と東洋一の電鐵王、南海鐵道我が電力界王者、大同電力、紡績界の大權威、岸和田紡績、其他十數社の社長、重役を承けたのであるから、或は幸福な人と言ふべきであらうが、而し君の如きは赤手空拳能く大業を成就するに足る才能を有し、縦へ先代の巨富なしとすることも必ず大成する人である。然るに深く廣く君の人物を認識せざる輩は棚から牡丹餅的仕合者であり、惣領の甚六扱するものは甚だ君を侮

辱するものご謂ふべきである。



日本の財界に輝く

泉州健兒

目次

新人寺田甚吉君を生んだ	一
新興の意氣に燃ゆる岸和田市	一
先代 甚與茂氏	五
財界に輝く寺田甚吉君	一三
社 會 第 一 步	一八
東洋の電鐵王南海社長に就任	二七

意見書の概要……………三一

輝やかしき繁榮の南海鐵道……………四一

南海鐵道株式會社沿革……………四四

根津會長と寺田社長の親善振り……………六四

大阪財界對根津氏の……………六七

偉大なる調和者寺田甚吉君……………六七

四千の従業員に心の糧を贈る……………六九

眞正なる實業家寺田甚吉君……………七〇

常識の發達したる寺田甚吉君……………七八

力の人 寺田甚吉君……………八二

祖先崇拜と郷土愛……………八八

至誠を産む優秀なる天資豊かな寺田甚吉君……………九一

端麗貞淑なる寺田富江夫人……………九九

郷土の賢弟……………一〇二

財界の
新人 寺田甚吉君之巻

新人寺田甚吉君を生んだ

新興の意氣に燃ゆる岸和田市

一、其 郷 土

岸和田市は往古掃守郷の岸と稱してゐたが楠氏の一族楠左兵衛尉成康の二男太郎親遠が河内から來て此處に住み其姓も和田と改めた此の人は名族和田氏の祖である。其子四郎高遠が楠正成の妹を妻に迎へて三郎正遠を生み其子に有名な南朝の忠臣新兵衛高家が生れたのである。

後醍醐天皇の建武年間に至りて楠正成戦功に依り攝河泉三國の守護職に任ぜられた時、正成は新兵衛高家を和泉守として當地に城を築きて和泉一國の守護に當らしめたのである。其時代に吉野にも同じ姓の和田氏が居たので時の人々は吉野の和田氏を上の和田と呼び、當地の和田氏を岸の和田と稱してゐたので自然地名も岸の和田と呼ばれるやうになり遂に岸和田と公稱するに至つたのである。

延元、康安年間には高家の弟和泉守正武が居城し、永徳二年に山名氏清が和田氏に代り泉州の守護職に任ぜられ、氏清は和田氏の一族信濃民部大夫泰義を岸和田城に置き、夫れより同兵部大夫泰連、和田兵衛佐義明、同左衛門尉義基の四代が岸和田城主であつた。

明德二年大内義弘が山名氏に代り應永六年細川頼長が大内の後を襲ひ、其家臣那和氏守護代として据ゑられ、天文十七年細川晴元は執權三好長慶と戦ひ、敗れて其所領は奪はれ岸和田城は三好の一族安宅攝津守冬康、十河左衛門尉一存が岸和田に居り、元龜元年織田信長が松浦肥前守隆信を泉州守護となり、寺田又左衛門が代官となり、天正五年豊臣秀吉の代官として中村一之之れに代り、天正十三年小出秀政、元和五年松平周防守康重に至り、寛永十七年岡部宣勝攝津高槻より入りて岸和田城主となつたのである。

以來岡部氏歴代繼承してゐたが明治二年六月岸和田藩制を布き、明治三年十二月藩地が堺縣の所轄となり、明治四年七月縣郡制に依り岸和田縣を置き同五年二月區劃の制定と共に再び堺縣に歸し、和泉國第十五區及第十七區に

編入せられ舊來の庄屋制を廢し區戸長制に依り始めて官選戸長を置かれたのである。同七年一月大小區制の發布に伴ひ第三區に入り明治十三年四月岸和田郡役所の設置と同時に岸和田町、岸和田村、岸和田濱町及び沼野村、藤井村、別所村を併合して沼野村と稱して茲に四ヶ町村の分立を見たのである。明治四十五年一月前掲四ヶ町は從來一團の姿を爲し、地形民情共に合併するを便とするを以て併合一町を設け古來の總稱に従ひ岸和田町としたのである。

更に併合後の岸和田町は商工業の發展進歩、戸數激増の實に底止するところを知らざる勢を示して來たので遂に大正十一年十一月一日市制を施行して今日に至つたのである。

先代 甚 與 茂 氏

泉州岸和田の名を聞けば何人も直ぐ天下の富豪、日本財界の巨人故寺田甚與茂氏を聯想するであらう。事實、岸和田の寺田か寺田の岸和田かと疑はざるを得ないまで氏が我岸和田市の最大至高の大恩人であること共に實に亦日本産業界の巨人であり功勞者である。

故人は嘉永六年十月二十四日岸和田に生れ、寺田家は代々酒造業を營み西之内屋と稱してゐた、明治八年國立五十一銀行を設立し支配人となりたるは實に氏は二十四才の時なり。

當時の岸和田は守舊靜止毫も活氣自大思想、自己尊大の町民が多く町の有

力者と稱す輩は唯に自己の榮達、富の増殖に吸々たるものにして如何に舊藩士が困らうが町民達が如何に生活に窮してゐやうが、そんなことは一切おかまひなく、富めるものは益々愈々富み、貧しき者は益々愈々急迫をつけ全く富の分配の公平を欠き町民の生活状態は極端に等差があり無産町民は常に有産階級の壓迫に堪へ兼ね、自然無産町民は有産階級の横暴に憤慨し遂に耐へかねて先祖代々住み慣れた岸和田を見捨て他に移住の止むなきに至らしめた若しアノ當時、アノ儘放任せんか益々町民は減じ衰退するより他に途がなかつた。けれども所謂田舎金持と稱する人達は拱手傍觀恬として顧みなかつた。然るに日に月に衰へ行く現状を目撃した、愛郷心に熱血を燃す氏が今にして町を救ひ無産町民に職を與へざれば遂に岸和田が減ろびる……と奮然とし

て起ち明治二十年七月第一煉瓦製造會社を創立し次で明治二十七年一月岸和田紡績株式會社を興して『空飛ぶ鳥に巢あり野に棲む狐に穴あり、されど人の子には住むところなし』と叫び吾等に職を與へ……職を與へずんば死を與へと狂乱する町民に仕事をあたへ以て移住を食止め失業者を救済し町を富ましめたのである。

而しながら好事魔多しで我利盲者の集團の田舎金持は寺田の野郎何をさらすかご種々なる手段方法を以て兩社の創立に妨害を加へた。然れ共人類愛と愛郷心に燃ゆる甚與茂氏が粉骨碎身、縦へ身を千々に碎くも敢て辭する處でないと興奮的彈力は一層猛火となつて氏を發奮せしめた、果然、大果然、大々果然氏の正義奮闘と天分の經營的才能と努力は遂に天の照覽するところ

となつて社運日に旺盛に向ひ遂に本邦紡績界の王座を占むるに至つたのである。

更に又勤儉貯蓄獎勵と泉州金融界の爲めに、明治三十年九月和泉貯蓄銀行を創立し、斯くして氏が財界にグン／＼と勢力を張り出し和泉銀行、和泉貯蓄銀行、岸和田紡績株式會社、岸和田煉瓦綿業株式會社、五十一銀行、南海鐵道株式會社、大同電力株式會社、高野山電氣鐵道株式會社、共同信託株式會社、泉州織物株式會社、關西製綱株式會社、東洋麻糸株式會社、其他二十數社の社長、取締役、代表社員の肩書を有し、西日本財界の巨頭として君臨し牢固として抜くべからざる勢力を有してゐた。

甚與茂氏の偉大な足跡を靜かに考察して見よ、世の大なる富豪若しくは實業家と稱するものを見るに其多くは時運の變遷に乗じて巨利を僥倖し、或は官僚と結び、又は政府庇護の下に事業を營み、眼中國家なく社會なく唯だ自利に汲々として富を積みたるの類ならざるはなく、之等を指して眞正なる實業家又は成功者として謳歌するを得べきや否や勿論世の實業家成功者の總てが斯の如く云ふ譯ではないが、併し國家的觀念乃至社會公共の見地よりして事業を創始し飽迄自力獨行、奮戦苦闘を積んで其目的を貫徹した眞の成功者、眞の實業家と稱すべきものは甚だ尠ない。此時に當り偶然にもあらず、僥倖にてあらず將又投機的貧狼的でもなく、全く自己の才能と智識とに依り自力奮闘の結果巨萬の富を作り、一面國家社會的の事業として人類生存の要素の一つである綿糸を供給して其生産を助長し、人類の福祉を増進なしたる

甚與茂氏の如きは初めて之を真正の實業家と稱すべく、又本邦紡績界の權威として我産業史上に特筆すべきものである。

而して氏の獨立自營苦辛慘膽、而かも權貴に阿付せず、流俗を趁はず、不義の富貴を貪らず、誠實熱心身を挺し産業の進歩發達に努力し、而かも氏が一生涯、國利に反し社會を毒するものは如何に有利の事業たりと雖も敢て之に關係するこゝもなく、一意専心正しき産業をモットーに國家社會に貢獻せる大功勞の没すべからざる國寶的實業家であつた。宜なる哉、氏の功勞を嘉し藍綬褒章及飾版を授けられ寺田家に煌々たる光を放ちた、昭和六年春頃から不幸病に襲はれ、遂に起たず、斯くして同年十一月二十三日大往生を遂げられたのである。

訃音一たび傳はるや、全岸和田市民は勿論、天下萬人が愕然とした。而も告別式の當日は朝野の貴顯紳士は申すに及ばず、無名の幾多青年が涙と共に焼香され、實に其數は徒歩焼香者は一分間に三十名乃至四十名を算し、自動車にて驅付くる者一分間に五台乃至十台、斯くして靈柩は定刻を過ぐるこゝに三十分、近親者並に關係者一同に守られ同市下野町共同墓地に向つた。本邸より墓地迄二十數町、暮色迫る市街の兩側に土下座して翁を送るもの、合掌堵列する市民及び一般會葬者、無言裡に肅々進む、靈柩は嗚咽と涙の中を縫ふて墓所に到つた、此の多くの人達の熱誠を憶ふ時、靈柩に扈從する關係者一同は、思はず帽を取り頭の下るを覺えるのであつた。感激深き喪主甚吉君始め多くの人達は、車中に聲を上げて慟哭するあり。翁の葬儀は岸和田市

始まつて以來大名も及ばざる實に古今未曾有の盛儀であつた。如何に翁生前の世間的の偉大を物語るものである。棺を掩ふて知る人の偉大さ、私共今何をか云はん。

財界に輝く寺田甚吉君

幼少と學生時代

一四

寺田甚吉君が初めて、此世の光りを見たのは明治二十九年十二月十一日である。

甚與茂氏には明治二十二年四月に長女千代同二十七年四月に二女秀を得たのみで、男子の嗣子はないものと、淋しい諦めの月日を送つてゐる時に、思ひかけなくも玉のやうな男の子を生んだ。生れた兒は非常な喜びを以て一家に迎へられた、父甚與茂氏は、生れたばかりの兒を抱きあげて喜んだ、生れた兒はクリ／＼と太つて、日増しに成長した。甚與茂氏は、此兒に甚吉の名を與へた。

甚吉君が獨り歩きする頃になると近所隣の鼻垂小僧と一緒に遊んだ、田舎の金持通有性の坊ん／＼らしくなく、毫も貴公子の柔弱なところはなく、年上の男の子と相手によく遊んだ。犬を追ふ、石合戦をする、鬼子ツこする、近所隣りの子供と喧嘩をする、田の畔に花を摘む女の兒の群へ悪戯をする、泣かされた兒の兄姉が仇討に来る。負けぬ氣の彼は年上の男の兒の腰にしがみついて争ふ、そうしてたゞの一度も泣き面をしたことがない。蕭洒なる美少年に似合はない剛情我儘な兒として町の評判であつたが人柄が好つたので誰れも彼れから可愛がられた。この腕白小僧が不思議にも學業に勵んだ町の小學校を首席で出て、岸和田中學校へ入つた、中學時代も勿論、學業が首位を占めてゐた、他の生徒は學校から歸へれば悪戯して遊んだが、君が決

して無駄な遊びはせなかつた。否、甚與茂氏が斷じて無駄遊びを許さなかつた。令弟吉之助君は屋敷の掃除からゴミ箱の掃除迄やつた、吉之助君は差してゴミ箱を荷つて濱へ棄てて行くのを屢々見受けたこともある。

二萬や三萬の財産を有する他の金持の坊んくは所謂坊んく面して遊び廻つてゐたが甚與茂氏はそんなことを見る度毎に苦しいことだに常に語られてゐたそうである。寺田家には多くの下僕や、女中がゐたから別段、甚吉君や吉之助君が屋敷の掃除や濱へゴミを棄てに行かなかつても事を欠かなかつたが、そこが甚與茂氏の偉いところだ。子供には決して無駄遊びをさしてはいかぬと云ふ強い信念を持つてゐた。斯くして甚吉君が百花爛漫の大正三年の春岸和田中學校第十三回卒業した、而して其卒業式には天が君の靜修、

不撓不屈の勉力を嘉納せられて全校首席の榮冠を贏ち得た。

直ちに上京して慶應義塾理財科に入學した、勿論在學中は孜々として勉學し、休暇には必ず歸岸して兩親に孝養を盡し、而かも泉州の大祭と云はれた例年九月十五日の岸城神社の祭禮にキツト歸つて泉州名物の地車曳をした、他の友人達は大學帽をかぶつて町内を俺は大學生だぞと云はんばかりに肩で風を切り威張散らして町内を横行したが、君にはそんな風が微塵もなかつた祭禮に直ぐ學生服をカラ脱ぎ捨て、その頃盛んに流行した、祭禮専用の若中揃ゑの印絆天を着て街の荒武者達に混じつて地車曳に狂乱した。また或時は岸和田特有のローカルカラー豊かな盆踊には汗と垢で臭氣紛々とした女工仲間群に割込んで盛んに踊り狂つて蠻殻を發揮し四邊構はぬ羽目を脱ばした

底抜けの民衆化を遺憾なく發揮してゐた。君はかうした風に若い時代から少しも金持の坊ん／＼と云ふた風の氣取つた氣風が藥にしたくてもなかつた。君は慶應大學理財科を出て學士様になつて歸つたのは大正九年丁度君が二十五歳の春を以て學問生活を終つたのである。

社 會 第 一 步

寺田甚吉君は學生、生活を終つて實社會第一步を踏み出し岸和田紡績に入つた、大正十年頃は我國の勞働運動の最盛期で各地に於いて勞資の争ひは熾烈の時代である。

勞働問題とは何か

人權と人格とは車の兩輪の如く人として欠くべからざる最も尊重すべき要件である、人にして人權がなくば奴隸に等しく人として人格がなくば人でない、勞働問題の其の多くは勞銀の値上と待遇問題とであるが究極の目的は決してさうした估息なものでない。從來勞働者が資本家から黄金萬能の暴威に依つて壓迫せられ恰かも奴隸の如き待遇に甘んじて來たのは勞働者が其人格を認められず、人權を無視せられてゐた結果である。

事實確かに我國の一部資本家は其發足點に於いて己に大なる誤謬に陥つて居た、即ち人間と貨物を轉倒してゐたのである。金錢と貨物が人間より顧慮すべき問題の如くに考へてゐたのである。朝より夜に至る迄驅使しつゝ尙其成績の擧らざるを責めながら相當の報酬を與ふる事を吝み且休憩、慰安、

娛樂を得るの機會を與へず、ために労働者は心身實に枯木の如く元氣なく、愉快なく感情の美しきもの喪失し日々の生活而かもそれらも辛らうじて糊口を凌ぐ程度の物資に逼迫して氣息奄々たるの状態にあり、況して己が最愛なる子女の教育をさへも果し得ずして塵埃莫々の工場裡に黙々として働き懊惱煩悶の闇から闇へ追はれて行く哀れな小羊同様であつた。然るに歐洲戰亂以來労働者が自覺して、斯くの如き奴隸生活に満足せず、其地位の向上と待遇の改善に向つて邁進し、資本家に對して先づ勞銀の値上げと待遇の改善を要求するやうになつた。労働問題進の過程に於て素より當然の結果である、私は前半生は殆んど労働運動の第一線に起ち無産大衆の爲めに微力であつたが全力を傾けて悪資本家と戦つて來た、私は悪資本家糺彈と一面に於いては

また、労働者自身も自ら人格の修養に努力すると同時に斯の尤も忌むべき、尤も厭ふべきゼネストの如きは國家産業の盛衰消長の上に多大の影響を與へ即ち、國家社會の生存發達上、尤も重要な經濟的産業方面を擔任する會社の盛衰は、直接に國家産業の隆盛に影響し、會社の成績の消長は一にかつて其會社に働く労働者の双肩にあることを思へば労働者の國家社會に對する責務の重大なる事、政治家、軍人、教育家等と何等徑底するところなしと固く信じて止まなかつた、止むに止まれずゼネストを敢行せざれば反省せぬ資本家に對しては斷乎として戦つたのである。

大阪府の産業の中心地であると云はれた我が泉州には當時労働者が五萬以上も居た、随つて各地にゼネストが續出した、當時泉州の模範工場だご自他

共に許してゐた、某社の如きすら屢々勞資の争ひが起つたが不思議にも岸紡は依然として無事太平であつた、兎角風評のあつた岸紡に何故に勞働争議が起らないのかと世人は寧ろ奇異の感を持ち奇蹟的存在であつた、否、岸紡には斷じて勞働争議が起らない理由があつたからである。

一部の資本家は勞働者の膏血によつて生み出せる、其多大の利得を以て藝者買ひ蓄妾、必要のない別荘を造つて贅澤三昧に其日を送つてゐたが、岸紡の寺田社長はそんなこと絶対にせなかつた、氏獨特の勤儉力行主義を以て終始一貫してゐた。實踐躬行自ら勉み、朝六時に出勤し、夕は勞働者や社員が退社してから社務を見て退出し、而かも彼等の衣食住、娛樂、慰安迄何呉れもなく心を配つて慈眼愛腸を以て彼等に接し、其給與の如きも當時我が紡績

界の勞働者平均一日収入が一圓六錢であつたにも拘らず、岸和田紡績は一圓十錢の最高率を示してゐた。曾つて寺田翁は私に向つて曰く『岸紡で働く勞働者は會社へ金儲けに來て居るのであるから待遇よりも金を多く持たせて歸らすのは私(寺田氏)の主義であつて又勞働者の希望である云々』斯うした主義を一絲亂れず絶対機械的であつて岸紡の勞働者の収入が他社よりも多かつたから勞働争議の起らない理由の一つでもあつたであらうが、更にまた他の理由としては社長自ら常に粗衣粗食に甘んじ、一見雜役夫の如き風態で勞働者と伍し、奮闘する翁が工場巡視する姿を見たときは如何に狂的思想を有する主義者と雖も翁に反抗する氣持になれなかつたことは事實である。

况んや善良なる勞働者に於いては社長の姿を神々しく拜し、翁の口元より

出づる言葉が彼等にとつては神の福音と聞えただからである。

然し斯く論じ來たれば如何にも岸紡は無事太平であつたかのやうに見ゆるが、唯労働争議は社長の人格の光りて押へてゐたもの其内面を一度覗けば幾多改造すべき問題が伏在してゐた。

元來岸紡には社長寺田甚與茂翁の代行すべき人物が居なかつた、岸紡及寺田家補佐の所謂重臣と稱すべき輩は大抵丁稚上りか、若くは工場の底掃きから成り上がり的高级社員や技術家ばかりであつて新時代と件はざるものが甚だ多かつた、随つて群り來る諸多の問題は一切合財甚與茂翁自ら陣頭に起つて處理して行かなければならなかつた。有體に云へば當時の寺田閥には人物が居なかつた、乾分には録な代物がなかつただけにそれだけ御大甚與茂翁に

は氣苦勞が多かつたことであらう、甚吉君が學業成つて、歸岸の直後に翁に向つて私は御子息がお歸りになつたのでお樂でせうと云ふたら、謹嚴な翁は莞爾としてへい大分助かります。と答へられた翁の言葉數が少なかつたが如何にも喜びそうであつた。

此の人物沸底の寺田閥に新智識、新學問した眼から鼻へ抜け通るやうな賢明な甚吉君が翁の片腕となつて岸紡改革に手を染めて内部の刷新を計り、君が得意の手腕と鮮やかなる社交を以て非凡なる實力が益々異常の業績を擧げたのである。

甚吉君の此の鮮やかなる力量、手腕を認識した翁が初めて安堵したやうであつた。或時翁に向つて私は御子息の腕が冴えて居ますねと云ふたらフン：

：「何うやら俺の後を繼げそうだ」と語られたことがあつた。

君が新たに社長に就任するや一層社内は明朗化し、徳望を以て部下の統御の任を全うし、對外的には君特有の社交的手腕を以て人を畏服せしめ、兎に角温情主義を以て敵を求めず、唯、幸にして自己の徳望と誠意が對者に迎合するあらばそれで可なりといふ内剛外柔實に我紡績界に稀に見る青年社長として業界は勿論其多くの社員労働者は君の徳望と豊なる人間味に感激して恰も慈父の如く慕ひ且つ崇敬してゐる。

東洋の電鐵王南海社長に就任

東洋の電鐵王、我國の最古參株であり、其古い歴史と長大なる經營線を誇る、南海鐵道株式會社は七千萬圓の老なる資本金と四千餘名の大従業員を擁し、偉風堂々として電鐵界の王者として君臨してゐる。同社に昭和八年春頃から高級社員や重役問題で紛争に紛争を重ね大波瀾の後を受けて同社の實權を握り我が財界の大立物根津嘉市郎氏其他重役諸氏の懇望に依り君が社長に就任したのは昭和八年十月二十八日である。君が社長に就任を新聞紙が翌朝初號見出して報ずるや、社會は愕然とした、何故社會が驚いたのか、芳紀正に三十八歳の青年紳士が、東洋の電鐵王南海鐵道の社長に就任したことは

確かに青天の霹靂であつた、老人崇拜の華城財界に僅か三十八歳の青年が七千萬圓の社長になるなんてここは財界人を驚かすに充分である。

君が就任直後全国の新聞紙は筆を揃ゑて激賞した。

就任後の寺田新社長は全く従前の所謂古い南海の殻を脱ぎ捨て先づ行詰れる古南海を更生せしめるには、禪を締め直し、頭が動かねば尾が動かぬ主義をモツト—として社長自から營業戦線の最尖端に立ち、朝は九時には出社し午後は五時過迄働くことゝ實に涙ぐましい活動を續け奮闘努力主義を第一に提唱し、而して四千の従業員に向つて「南海は諸君の南海である、諸君の南海なるが故に働こう、社長も又諸君と伍して働く、苦樂も亦諸君と俱にせん」と君が平素抱ける所謂共存共榮主義を遺憾なく赤裸々に發表し全員に呼びかけたのである。

今迄の墮氣滿々たる氣分を一掃に努力した、斯うした明朗なる新青年社長の意氣に感じた全社員従業員諸君は「よし社長にその決心と覺悟を有し眞に共存共榮で行く氣持なら俺達も働く、オイ兄弟働こうぜ、寺田新社長の氣持はハツキリと判つた、新社長の爲めにご」全員は恰も眠れる獅子が醒めたるが如くハチキレそんな緊張振りで營業戦線の戦士は意氣天を衝く勢である。

又新社長は社會に向つて如何にも男らしく次の様な聲名をした。

南海鐵道は株主の利益のみの存在でなくして社會公共のための存在である。社會公共の爲めなるが故に天下の公器の使命と天職を完全に盡す決心である云々。

嗚呼……なんぞ云ふ氣持の良いそうして男性的の聲明であらう、我國には數萬の交通運輸機關が有るが未だ曾つて寺田社長の如き如何にも小氣味の良
い痛快な朗らかな聲明をしたものを私共は聞いたことはない。俄然……南海
株は天下の市場を賑はした、再び新聞は君を絶讃して止まなかつた。

君の就任後間も無く南海には一大問題が突發した、一大問題とは即ち斯の
バス問題である。バス問題の解決の如何に依つては東洋の電鐵も全く一大致
命傷を受けなければならぬ重大問題であつた。同問題は昭和九年八月突如こ
して持上り大阪市民の權益の爲めに一致團結して市に許可すべく猛然こ起ち
上つた。而かも全市會議員、市郡選出府會議員、代議士等自己の選舉地盤關
係を顧慮して打つて一丸こなつて内田鐵相に肉迫した。南海こしては營業の

性質上大阪市民三百萬を向ふに廻して戦ふのを敢て好まず、慎重なる態度を
持し沈黙を守つてゐたが、市會の決議となり、市民大會開催へ急テンポに
火の手をあげて盛んに南海を非難攻撃するので南海鐵道でも自社の立場を明
らかにし世論の誤りを是正したいといふ意味から遂に沈黙を破つて同年九月
一日寺田社長の名を以て意見書を後藤内相、内田鐵相を始め市郡選出各代議
士、府市會議員、其他に發送して正々堂々こ應戦した、實に寺田社長の意氣
壯哉であつた。

意見書の大要

難波住吉公園間自動車營業免許に關し、弊社は大阪市營自動車と競願と相成り府知事閣下が大阪市長の答申せる一
路線一營業主義を考慮せられ交通事業者としての市と弊社との實用を精査の上、公明なる國家的見地より、阿部野橋

堺線は市に、難波住吉線は弊社に、許すべしと内申せられたるやに對し、目下大阪市に於て反對の論議相生し遂に大阪市會の建議を見るに至れる事は弊社の競願に屬し誠に恐縮に堪へない次第であります。

然れども本問題は官廳相互間の内申に關する事項なるを以て弊社としては自ら深く慎みて意見の發表を差控へたるも、既に市會の建議となり更に世上の論議が往々にして事の真相を謬る嫌あるを見ては、最早や黙過するに忍びず一言以て各位の御清鑑を仰がんとするのであります。

一、府知事の副申問題に對する解釋上其他の論議は弊社は成るべく之を差控へます。

今回問題となりたる府知事閣下の副申問題は、昭和六年現行自動車交通事業法に關する帝國議會に於ける附帶決議並に昭和八年二月鐵道省監督局長の依命通牒により、現に營業せる並行鐵道軌道營業者に優先免許せらるべきは甚だ明白であります。が昨年十月同法實施の結果其の免許權が鐵道大臣に歸屬して以來、官廳相互間の行政事務取扱の問題となり、吾等が云々すべき筋台のものに非ざるものと考へます。斯かる官廳内部の副申が外部に漏れたる事自體が甚だ遺憾である上に、知事閣下が事の真相を明にせらるゝ爲め、已むを得ず援用せられたる通牒指示要項等につき、激越なる態度を以て論議するが如きは、穩當を缺くのみならず斯の如き事例は將來營業者としての市と、一私人、會社との利益が一致せざる場合に、知事其他監督官の公止なる裁斷を妨げんとする虞を生じ面白からずと思ひます。故に依命通牒其他の事項に關する解釋等は主務大臣閣下の公正なる裁斷に俟ち、弊社としては市當局市會其他と根本的に見解を異にするも之が論議を差控へます。

二、行政廳たる市の本分と一交通事業者たる市とは截然たる區別があるべきであります。

大阪市は道路を市に於て築造したりとの理由を以てバス營業の獨占を高唱せらるゝのでありますが、元來此道路の管理權は國法に依り市長に委任せられた權限でありまして、バス營業者たる市は單に一交通事業者に止まり民間企業者と何等の差異あるべき筈がないにも拘らず、世上往々にして此二つの人格を混同誤解されるのは甚だ遺憾であります。道路工費を大阪市が負擔せらるゝは獨り難波住吉線だけでなく、公共團體たる市が負擔す可きことは國法上當然の義務であり、且つ完成後は之を開放して一般交通の便利に提供せらるゝのが都市計畫事業本來の精神であると思ひます。現に巨費を投じて市が築造した道路上を、市民の好評を博しつゝ、民營青バスが運行して居るではありませんか、然るに何故に市は難波住吉間に限り道路費負擔を高調して弊社を排撃せらるゝのであるか甚だ諒解に苦しむ所であります。殊に此國道第十六號線は市内局部の交通のみを目的とするものでなく、弊社鐵道に並行して堺、岸和田兩市經て和歌山に至る國家の幹線道路であるから市營バスを以てしては完全に其使命を果し難いものであります。

三、市の財政より見たる市の交通營業

交通營業は近時其の經營最も困難なる事業にて、従つて市の如く租稅其他公課を徵收する公共團體の事業として適切なりや否やは世に定論があり、世界の大都市たる倫敦、紐育、市俄古、巴里等は凡て市内交通を以て私營本位にせざるものは無い様であります。蓋し惟ふに近時大都市交通の發展は迅速を極め、道路港灣、上下水道衛生保健施設等幾多の爲すべき職能ある市が、交通營業者として没頭とすることは到底不可能であるから、世界の大都市は出來得る

限り之を私營に譲り之と連絡統制合同等に依つて市内交通の圓滿なる運川を爲し居るのであります。

若し我大阪市にして路面電車を初め巨額の資を投じて地下鐵、バスを新に編入せられたる市の新區域に擴張し、然も市が電氣軌道經濟が疲弊せりとの理由を以て郊外電鐵が多年培養せる領域に進出し、其の營業の根底を脅し、以て電氣軌道經濟の經營の安定を圖らんとする如きことあらば、市の財政の缺損を補ふ爲めに民間會社の永年努力せる營業收益を以て自ら充てむとする結果となり、其の公正ならざること明白であると思ひます。

四、市と郊外電鐵との交通連絡統制

我大阪市を圍繞する各郊外電鐵は市内交通の重要な責務を帯び市の益々發展するにつれて、郊外と市内の分界は交通上愈々不鮮明となりまして、遠く寶塚、芦屋、枚方、奈良、濱寺、長野に及び大阪市の交通運輸に至大の貢獻を爲して居ります。斯く市と郊外電鐵との關係殊に密接であるから、徒らに市内交通獨占の理論に偏せず、市は寧ろ舊市區内の交通に止め、郊外電鐵及び兼營バスの都心乗人を承認し、自動車、其他道路利用者の道路損傷程度に應じ一率の公課を徴し、市の内外居住者に對しては郊外交通機關の都心直通の利便を謀り郊外電鐵と連絡協調の態度を示してこそ初めて市内外の交通の圓滿なる發展を期し得べく、眞の意味に於て沿線並に市民數百萬人の便益となり、同時に二重投資一重乗換具の不都合も除去せらるべきものと信じます。大阪市にして飽く迄も市内交通獨占を主張せば南海、阪和、大鐵の如きは人和川以北を買収すべく、阪神、阪急の如きも神崎川以南を市の經營とせざるを得ないことになりす。

要するに大阪市の交通統制の根本は國有鐵道並に郊外電鐵との協調であつて決して市の交通獨占では無いと思ひます、若し市にして道路管理者として一路線一營業を強調しつゝ更に其のバス營業をも道路工事費負擔者たるの理由を以て市が獨占し既設鐵道軌道の營業の根底を脅す如きことあらば、之れ交通統制の精神を謬れるものと謂はねばなりません。

五、難波住吉間は弊社の生命線であります。

難波住吉間は明治十八年以來五十年の久敷に亘りて弊社の獨力開拓し來つて線路であつて弊社の最も重要な交通區域で弊社鐵道收入の約三分の一は實に難波住吉間の收入であり此の區間に一町を隔て、他經營のバスを運行せらるゝことは實に弊社の致命的打撃たるは火を燎るよりも明であります。之れ實例に徴するに弊社阿部野橋住吉間即ち上町線軌道の如きは市バス、青バス開通の結果一ヶ年四十六萬圓の收入であつたものが今日漸く二十三萬圓に減じ即ち五割の減收を受けたのであります。弊社は開業の年古く沿線の田野が開拓せられて人家となり、低廉なる資産の差益と相俟つて相當の成績を擧げて來ました。然るに昭和五年以來バス其他競争線並に不況の爲め收入の大激減を被り甚だ困難を感じましたが、弊社多年沿線に對する努力に依る御愛顧と附帶事業の成績に依り聊か安定を得たる時恰かも當難波住吉間バス免許問題に直面致し弊社の生命線を脅かされ目下浮沈の難局に立つて居る次第であります。

六、難波住吉間に對する弊社の努力

難波住吉間の御乗客は斯く弊社收益の根源なるも以て弊社は出來得る限りの努力を拂ひ、難波住吉間の複々線計畫

も既に住吉天下茶屋間の敷設の終り、又難波天下茶屋間も複々線用地の買収略進み鋭意改善に努力し来り居るに拘らず往々一片の感情に依り弊社が市内區間の輸送を閑却する如く宣傳する者あるか甚だ遺憾であります。茲に参考の爲め昨年六月十五日時刻改正の結果難波住吉公園間各驛の停車回数を見ましても今宮或二百回、萩茶屋百十三回、天下茶屋二百八十回、岸の里五十九回、玉出、粉濱各々九十九回、住吉公園三百九回を増加致し難波住吉公園間各驛の停車車輛は激増して居るのであります。

殊に從來列車は殆んど大和川以南に於て將席を優先せらるゝを慮り難波住吉間御乗客の利便の爲め住吉公園始發を一日約百五十回新設し、誠心誠意出來得る限りの努力を致し居るのであります。

若し弊社に難波住吉間バス營業免許相受るを得ば鐵道との相互連絡其他に就き監督官廳の許さるゝ範圍に於て最善の努力を致し市營バスの企及し得ざるサービスを提供致す確信を有して居ります。斯く難波住吉間バス營業免許の問題は實に弊社の生命線の問題で弊社多年努力し來りたる區域に市營地下鐵路面電車、バスが進出し來り我が營業の根底を破壊せんとするものであります。弊社は問題が既に主務省に移り、鐵道、内務兩大臣閣下の御裁決を待つ可き現狀に則し、只管事情を具して陳情し誠心誠意監督官廳たる御當局各位の公正なる御調査を仰ぎ、謹みて公明なる御裁斷を得るに善處致し度いと存じます。茲に各位の特別の御聲援と御助力を希ふ次第であります。

右の如き穩健適切妥當なる意見を發表し南海の立場を鮮明にした、之を見た

る大阪市民も南海の立場を諒解し、さしも熾烈を極めてゐた運動も鳴を鎮めたが選舉を目當においてゐる政治家は依然として猛烈な運動を續けた、南海側に於いても寺田社長、中山專務は總ゆる方法を以て對抗し各方面に向つて白熱的運動し或時の如きは三十九度の高熱に冒され上京内田鐵相、後藤内相其他に陳情した、其熱心其眞劍な態度には當局も尠からず動かされたのである。しかし南海側の猛運動も空しく遂に今夏條件附にて大阪市に許可された。本來此バス問題が、何のために問題になるのか、當然南海に許可されるべきもので現に第五十九議會に於いて次の様な附帶決議されてゐる。

附 帶 決 議

『現ニ營業中ノ地方鐵道又ハ軌道ニ通行スルバス事業ニ就テハ原則トシテ

當該鐵道軌道業者ニ優先シテ免許ヲナスコト

右の附帶決議を以て見るも難波、住吉間は南海本線に接近並行したるものなれば縣知事の明快なる副中は公正なるものであつたから當然南海に許可なるものご何人も信じ、又許可されるのが鐵道省の一定不動の鐵則であつたのである。

然るに議會の附帶決議も國家の官吏は天皇陛下の政府に對し忠實至誠の副申も世論も顧みられず、大阪市に許可されたのは當局は自治權擁護の美名ご三百萬市民ご云ふ集積の力に脅やかされたのである。

しかし、バス經營の許可が市に許可されたが其附帶條件は南海に取つては頗る有利である。何故か、國道第十六號線は現在は大國町、住吉間であるが

將來は大阪、和歌山の兩市を繋ぐ所謂郊外道路であつて現に堺市、泉北郡大津町迄開通し來年度には岸和田市迄延長開通する豫定になつてゐる。

此の海岸を繋ぐ十六號線が開通すれば必ず、岸和田市或は和歌山市を起點として南海がバス經營することは火を見るより明らかである。然る場合には此條件の内容審さに検討するなれば當然大阪市中心に乘入出来ることは認められてゐる。更に又、現在に於いても南海が多大な損害を蒙る場合は市側から相當報償されることになつてゐる。所謂内田鐵相の血も涙もある決裁である、此の條件の内容を検討するごきに如何に内田鐵相が苦心されたかご云ふ事實が一字一文に歴然たるものがある。而かも頑固一點張で押の一手で進む内田鐵相が斯かる條件を附す迄に到らしたのは、誰れが何んご云ふても寺田

四〇
社長が一ケ年間に於ける苦心慘膽實に文字通りの努力奮闘の賜ものであること
斷言しても敢て過言でない。

實際有体に云へばバス問題が君が實業界に乗出したる其手腕力量のメンタル
テストであつたのである。若し不幸にして失敗せんか、白面小僧、何が出
來るか、非難攻撃の矢面に立つて遂に旗を捲いて岸和田に引上げなければな
らぬ君にとつては重大問題であつた。

勝てば官軍敗れば賊である、名に於いて市が勝利を得たが其實を南海が完
全に得たので當初から注視怠らなかつた世人は君の此の冴えた快手腕にはア
ツト大聲を上げ絶讚した。實に君が偉い、三百萬市民を向ふに廻して小氣味
の好い相撲を取つて完全に勝利を得たことはわれ等泉州の大なる誇りである

輝やかしき繁榮の南海鐵道

南海鐵道が本邦鐵道界の霸王であることは今更敢て贅言を用ゆる要がない
が、その鬱乎たる事業圏は實に我電鐵界の白眉である。

その經營振りの周到、綿密、社員、従業員の優待に於いても遺憾なき設備
が整ひ、寛容鄭重なる優遇方法は全く首尾脈絡完備し、宛然一大掌踵の如
く起倒盛衰が定まらない斯界に駭々乎々として一糸亂れず、進展の歩武を示
しつゝある業績は眞に稀觀の偉觀である。

徒らに巨資を擁し、膨大なる規模を有し而かも經營に困憊して左支右吾、
僅かにその事業の命脈を保持するに吸々として居るものに比し全くその選を

異にしてゐる、我が電鐵を語るものをして夙に代表的電鐵會社であるこの讚辭を崇敬を受けるのも故なきにあらずである。

しかし同社の今日あるは勿論寺田社長の努力に俟つところ大なることは勿論であるが實に君が就任以來全力を其經營に傾け苦心策劃向上發展の理想に邁進し、他重役及社員諸氏亦協力戮力社業の興廢を以て一身の榮辱を以て努力を傾注し延いては従業員の發奮を喚びたる結果に外ならぬ。

而かも同社の方針たるや隨時寺田社長が發表せる意見抱負に依り窮知せらるゝ如く切に斯界の北斗星たるを期するに在りて、其今日の成果は社長以下一使用人の末に到る幾千人が更生後粒々辛苦の結晶たる亦能く世の知る處である。

然らば同社關係者諸氏の決心覺悟は所謂、斯の綱利賣名の實業家と異り眞に懸命を極め、曾て宣明せる如く同社事業を以て生命とし、専心全力を傾注し、粉骨碎身社業の發展經營設備の向上を念とし一路此道程を辿れるのみ顧みず、従つて同社營業成績が又他社の容易に企及し得可からざる諸多の優點を有し、駁々乎々として日に月に進展を重ね、着々社業擴張の餘裕を示し首尾一貫規模の充實に力め、株價益々高く市場に於ける隆々たる信望を蒐め得るもの全く其卓越せる經營の結果たりと謂ふべく、終始一貫巨然として正々堂々其足跡は巨人の夫れにして眞に王者の歩みと謂ふ可く、同社が全く業界の覇者に非ずして王者を以て稱せらるもの誠に其所以たり。

かゝる大會社が東洋の商工都市大大阪に存在し、而かも其社長が泉州人た

るに於いては諸君と共に衷心誇りとするものである。

然らば南海鐵道が果して如何なる歴史を有するものか苟も南海を知り、而して其内容を知らんと欲し又齊しく聞かんと欲してゐる。私は茲に見るころありて南海鐵道株式會社の沿革を述べて些か諸君の参考に供したい。

南海鐵道株式會社沿革

南海鐵道株式會社の沿革を述べるに當つては、其の前身たる阪堺鐵道會社の生ひ立ちを述べねばならない、即ち資本金二十五萬圓で明治十七年、藤田傳三郎氏外十八氏の發起に依つて創立された阪堺鐵道が難波新地を起點として堺に至る延長六哩二呎九吋の狹軌鐵道を開業した。之れ我國に於ける私設

鐵道の嚆矢にして明治二十年全線開通したのである。別に堺と和歌山市を結び付ける爲めに當時財界の大立物松本重太郎氏を盟主として、田中市兵衛、鳥井駒吉、竹尾治右衛門、岡村平兵衛、川端三郎平、横山勝太郎、宇野四一、佐々木政又、寺田甚與茂、渡邊鐵心、宮本吉右衛門、北島七平、垂井清右衛門氏等を創立委員として紀泉鐵道なるものを起し、阪堺鐵道との合併を結んだが、然し時偶々商法中會社法の實施せらるる時で法律の明文に抵觸する處があつたから明治二十八年五月十五日合併契約を改訂することにして紀泉鐵道を合併し、紀攝鐵道と改稱して後ち再び南海鐵道と改稱し、明治二十九年三月三日設立を許可せられた、即ち資本金二百八十萬圓にして現在の南海鐵道株式會社が眞實に孤々の聲を上げたのである。越えて翌年九月三十日に

一百萬圓で阪堺鐵道を買収し、同三十一年十月一日に同鐵道の軌道を改築し大阪、和歌山市間の開業を漸次に進めて行つたのである。

開業第一期の決算、即ち明治三十年十月一日より同三十一年三月三十一日迄の損益計算を利益金處分案に會社が今日迄に如何に膨れ上つたか云ふことを一目にして見出せるやうに本年四月一日より九月三十一日迄の損益計算の利益金處分案を次に列記して見る。

開業第一期 自明治參拾年拾月壹日 至明治參拾壹年參月參拾壹日 決算

利益金分配案

金六萬一千四百九十七圓六十錢六厘	運輸收入	金四萬一千十四圓二十九錢六厘	雜收入
合計 金十萬二千五百一十一圓九十錢二厘	營業收入		

金六千二百十三圓一錢	線路保存費	金二萬一千四百九十四圓四十九錢七厘	汽車費
金一萬四千七百七圓五十一錢六厘	運輸費	金二千九百二圓六十六錢六厘	總保費
合計金四萬五千三百七十七圓六十八錢九厘	營業費	差引 金五萬七千九百九十四圓二十一錢三厘	當期純益金

純益金分配

金五萬七千九百九十四圓二十一錢三厘	當期純益金		
金一千四百四十二圓七十一錢八厘	創業費消却	金三千圓	積立金
金三千圓	役員賞與金	金四萬八千七百二十圓	配當金
差引 金一千三百三十一圓四十九錢五厘	後期繰越金		但シ一株ニ付八十七錢即チ年四朱

右の様な貧弱計算であつたが本年九月末の決算には次の如き數になつて居る

損益計算書 自昭和拾年四月壹日 至昭和拾年九月參拾日

收入之部

一金四百八十一萬千六十五圓七錢 鐵道收入

金四百二十二萬五千六十九圓九十六錢	運輸收入	金五十九萬五千九百九十五圓十一錢	雜收入
一金七十七萬三千六百七十六圓三十六錢		軌道	收入
一金九萬四千四百六十五圓十六錢		自動車	收入
一金二百七十三萬二千七百二十六圓八十九錢		電燈電力	收入
一金六萬九千四百六圓二十二錢		遊園	收入
一金二千二百九十二圓八十九錢		土地家屋	收入
計金八百四十八萬五千五百九十二圓五十九錢			

支出之部

一金二百九十萬六千二百七圓二十錢	鐵道	支出
金二十一萬八百七十圓十二錢	線路及建物保存費	
金百八萬三千二百三十八圓八十錢	運輸費	
金二十九萬九千四百六圓五十八錢	諸稅	金六萬四千九百三十九圓十八錢建設營業關聯費分擔額
金二十四萬四千四百九十二圓七十七錢	諸利子分擔額	
一金六十三萬三千七十一圓三十四錢	軌道	支出

一金九萬二百六圓五十七錢	自動車	支出
一金百七十六萬九千五百四十七圓十一錢	電燈電力	支出
一金八萬六千十圓十二錢	遊園	支出
一金 萬七千八百七十圓二十四錢	土地家屋	支出
計金五百五十萬二千九百十二圓九十八錢		
金二百九十七萬八千六百八十圓一錢	利息	金
一金 十 萬 圓	水害其他特別償却引當金	
差引金二百八十七萬八千六百八十圓一錢	當期	純益金

純益金分配ノ事

一金二百八十七萬八千六百八十圓一錢	當期	純益金
一金百一萬三千九十七圓五十二錢	前期	繰越金
計金三百八十九萬千七百七十七圓五十三錢		

内

金十四萬四千圓	法定	積立金	金二十五萬圓	改良及償却積立金
---------	----	-----	--------	----------

金二十萬圓

從業員養老退職手當積立金

金五萬圓

役員賞與金

金二百十六萬圓

配當金

年一割	本株	(五十圓拂込)	一株ニ付	金二圓五十錢	第十三新株	(三十圓拂込)	同	金一圓五十錢
第十四	新株	(二十五圓拂込)	同	金一圓二十五錢	第十五新株	(十五圓拂込)	同	金七十五錢

金百八萬七千七百七十七圓五十錢

後期繰越金

右の二つの數字を相並べて見るなれば南海が春風秋霜五十年の間に如何に膨れ上つて來たかと言ふことが窺はれると同時に創立當時以來の關係者である、垂井清右衛門氏の如きは今日の此の盛觀と對照して蓋し隔世の感を抱かしむるに大なるものがあらう。過去五十年間に膨れ上つて來た南海の經路を今一つ明確に現はす方法として資本金の變遷狀態及び線路竣工順序などに就て此の間の事情を瞭らかにして見る。

當社の工事設計は難波新地六番町から和歌山市間を四區に大別して更らに之れを九工區に細別し、明治二十九年六月に用地の買収に手を着けて、三十年二月一日に工を起し、堺、佐野間十五哩三十八鎖を同年九月に竣成した。之れに次いで、佐野、尾崎間五哩四十八鎖を同年十月に竣成し、住吉、堺間の改築工事及び尾崎、和歌山北口十二哩六鎖は三十一年十月に天下茶屋、天王寺間の支線は三十二年六月に用地の買収に着手して三十三年一月に起工、同年十月に竣成したのである。同三十四年二月に天下茶屋、住吉間の三線敷設工事に着手して同年九月に和歌山北口、和歌山市間一哩六鎖は三十五年五月に起工、翌年三月に堺、濱寺公園間の復線工事は三十九年三月に着手、四十年六月に竣工した。政黨關係の爲めに政商連の暗中飛躍に依つて特許を得

た浪速軌道は當社に後に於て合併されたが夫れは後に於て述べるが、舊浪速軌道の上町連絡支線は四十二年に起工、翌年九月に竣工、濱寺、佐野間の復線工事は四十四年に竣工したのである。

當社の本線の工事は右様の順序を以て竣工し現在の如く和歌山市迄の復線の竣工を見るに至つたのである。

資本金の變遷状態は之れを表示するなれば次の如くである。

明治二十八年	二百八拾萬圓	明治三十一年	四百萬圓
明治三十三年	五百萬圓	明治三十三年	五百七拾萬圓
明治三十九年	七百三拾萬圓	明治四十年	八百二拾萬圓
明治四十二年	八百五拾四萬圓	明治四十四年	一千萬圓
大正四年	一千三百六拾萬圓	大正六年	一千四百四拾四萬圓

大正七年	二千二百萬圓	大正十一年	四千五拾萬圓
大正十二年	五千萬圓	大正十三年	七千萬圓

即ち當社の資本金は過去五十年の間に二十五倍に膨れ上つたのであつて、私設鐵道會社としては實に東洋一の會社となつたのである。

浪速軌道を三十四萬圓で明治四十二年に買収した時は兎も角も競争出来る脅威によつて相手方の會社が當社が合併するの甘味につけ込んで當社に合併さす可く政友會系統に依つて明治四十三年に資本金三百萬圓を以て阪堺鐵道會社が創立されたことは當社に取つては大なる脅威であつた、阪堺の社長は當時華城財界で飛ぶ鳥も落すような勢であつた片岡直輝氏であり、之れに配するに岩下清周、永田仁助、松方幸次郎氏を並び大名とする會社丈けに其當

時に於ける当社専務であつた大塚惟明氏が競争會社である阪堺との對抗策に就ては大いに頭を悩ましたものである。

当社に阪堺を賣付ける目算を以て阪堺を創立したが当社の大塚専務は内心は兎の角敵に弱味を見せてはならず互ひに戦ふべしとの決意を以て阪堺開業後火花を散らしての接戦を開始したが時會々日露戦役の財界反動期にて一般財界の不況に搗て加へての阪堺との競争の爲め當社の經營状態は非常に苦しく大塚氏は遂ひに専務の月手當を辭退し一文にても多く経費を節約し夫れを株主の配當維持に努めることにしてマッチ一箱の節約をも八釜敷く言つたエピソードのあつた時代である。

當時の當社の成績は八朱配當を割込まんとする悪成績である。

競争會社の阪堺この太刀打ちの爲め大株主は會社の成績不良を攻めて止まないやうな状態であるから蓋し大塚氏が焦慮し、右の舉に出たのも止むを得ぬことであらう。大塚氏に於て當時の苦しいことを回想するなれば克くもあれ丈けのこころを遣り切つたものにて其の若かりし時代と勇氣に富んで居た事を秘かに微笑んだことがあつたそうだ。兩雄闘へば必ず一方が斃れることは一二と二を合したなれば四となること云ふ小學校の一年生の算術より以上に明白である丈けに之れ以上闘ふことはお互に不利として阪堺と南海との競争は遂に大正四年四月に阪堺を三百六十萬圓で合併したことに幕切れを見ることになつたのである。

阪堺合併と共に片岡大御所が南海の社長の印綬を帯びることになつたが此

の場合に於ても普通の場合に於ては被合併會社の社長が新會社の社長となること云ふことは實際問題として是有り得べからざることであるのに大塚氏が片岡氏に社長の席を譲つたのは何の故であるかは詮索することを見合はずが大塚氏が阪堺との競争に依つて却々エライ目にあつたこと云ふことは此一事を以てそこに或る何に物かが見出せるであらう。

阪堺合併迄に大塚氏が當社の爲めに大いに努力したのは全線の電化も其一であるが夫れよりも淡輪の開発に就いて努力したのは可成、莫大なものである。淡輪開發に就いて當社がエコノミツク的にはどう言ふ成績を得たか云ふことは兎も角も列車を淡輪の山の上に引張り上げて汽車ホテルを經營したいことや、夫れより以前に浪速號、和歌號の列車に食堂を設けて、美人のボー

イを乗込ましたことは會社の經營と歴史と云ふ點から見逃せぬことである。

大塚氏が大正八年十月に専務を辭任したが當時支配人であつた佐々木氏は大塚氏の女房役として永らく扈從して來たので選ばれて専務になつたが、環境は此人をして専務の椅子に長らく座はらすを許さなかつたこと見へ、同年三月金五萬圓を貰つて専務の椅子から退いて終つたのである。

同氏と入れ代つて大塚氏が更に専務として返り咲きを見せることになり、同年九月に大御所片岡氏の社長辭任となつたが、片岡氏の社長としての置土産は高野鐵道を四百萬圓で大師鐵道を百萬圓で當社に合併したのである。

十二年四月に大塚氏が社長として就任を見ることになり、南大阪電鐵の合併を理想として大塚氏は樹つたけれども、兎に角健康が勝れない所から同十

三年三月に社長を辞任して。同氏を入れ代つたのが渡邊千代三郎氏である。同氏は阪堺合併以来の重役となつた人だから當社の天下は再び舊阪堺側の重役に依つて掘り出された譯であつて歴史の古い南海鐵道自體から見るなればそこに一種の悲哀を感じんでもないが然し會社を經營するに云ふこと、株主の福祉増進に云ふ點から見ると粟粒のやうな小さな問題であつたのである。

當社の高野合併の裏面の事情など書くに却々面白い問題があるけれども夫れは他日に譲ることにするが渡邊氏は當社の天下を握ること、もに選ばれて専務の印綬を帯びたのが前社長岡田意一氏である。

岡田氏の就任前に労働爭議の卵子が出来て居た。

當社は昭和二年七月十二日に於て當社開業以來未曾有の労働爭議が勃發した。當社の歴史と言ふ上から見るとなれば之れは特筆大書すべき問題であるが本稿からは之れを除いて置く、之れに亞いで大減首の問題も起つたが歴史の古い爲めに沈滞した空氣を一掃する上から及び緊張性を帯びさすに云ふ點から見るとなれば光を上げるに就ての犠牲は餘儀ないことであつたらう。岡田氏は自分の女房役として鐵道省から引抜いて來た荒木三郎氏を營業部長に吉岡常松氏を運輸課長に兩氏を右翼と左翼に當らしめて高野線の復線計畫、舊大師鐵道を推出迄の開通、本線を取敢へず、住吉迄復々線にするに和歌浦線の建設に就いてのプランを樹て同氏を入れ代つたのは前社長岡田意一氏である、同氏は専務時代より新和歌浦進出に着々準備中のところ偶然にも昭和

六年八月和歌山市多年の懸案であつた和歌山築港が一百七十萬圓で和歌山縣營で造營する事に決定したので當社としては新和歌浦へ進出の絶好の機會なりとして各方面からの寄附方の勧誘が猛烈に開始されたので當社としても新機軸の樹立をせなければならぬ時機に際會して居たので岡田専務、後藤技師長らも大いに乘氣になり重役會の決定を得て二十萬圓醸出するに決定したのである。

然かも其二十萬圓は一時に醸出するのではなく四ケ年の間に年々醸出であり尤も有利な條件を附してある。其條件は現在の市驛から新和歌浦に至る新線路敷設に要する土地を無償で譲り受けることになつてゐるそうである。當社は最初の計劃の經費一百五十萬圓に比較して電車敷設の土地買收費はかゝら

ぬのだから一百萬圓足るか足らざるで新和歌浦迄完全に敷設が出来得る。新和歌浦線完成後は難波新和歌浦間直通の電車を運轉なすことになるので人氣實に百パーセントである。昭和七年四月に現専務取締役中山隆吉氏は大阪鐵道局長の榮職を去つて當社に入社し昭和八年十月岡田氏は退き新人寺田甚吉氏が社長に就任したのである。以上に述べたことが當社の過去と現在に就ての或部分であると同時に當社の今迄の概要を記した迄であるが南海鐵道なる天の與へた使命の遂行と開拓は實に今後にあるのである。

新和歌浦開通後に於て迫つて來る問題は阿波徳島と大阪市とを最も短縮した時間で結び付けることである、之れをファストスニツプとして四國循環鐵道の竣成と共に四國と大阪市とを最も短縮した時間を以て海路は快速船で連

絡し結び付けに使命を有するのである。尙進んでは九州の西端部と伊豫の一角を快速船で以て結び付け九州と大阪市との間を短縮した時間にて結びつける使命をも有し、更に又海路で国立公園南紀方面の開拓と連絡を思ふなれば南海鐵道株式會社の前途實に洋々たるものがある。

近視眼者は南海の將來は行詰まりと斷ずるものがあるけれども其觀側の著るしい的を逸して居ること爾く批評する人の眼光が如何に鈍いかと云ふことに針の穴から天を覗く底の小さい觀察であるここを本文を讀むに於ては其人自らの眼に映ずるここを見出すであらうと思ふ。當社の使命は今迄の足跡より寧ろ向後により多く大なるものがあり、前途の洋々たることが窺はるのであるが晉南大阪電鐵の統一が如何なる形式に依つて行はれ如何なる順序

に依つて南海の傘下に集注して來るか否やとのことは筆者をして其大膽なる豫言を爲さしめることは豫言者でない我等には出來ないことであるここを附記して筆を擱く。因に當社重役諸氏は左の通り(昭和十年九月現在)である。

取締役會長	根津嘉市郎氏
取締役社長	寺田甚吉氏
専務取締役	中山隆吉氏
取締役	佐々木勇太郎氏
取締役	垂井清右衛門氏
取締役	大塚晃長氏
監査役	寺田元之助氏

根津會長と寺田社長の親善振り

六四

電鐵界は他事業界に比して人物の數に於いては慥に見劣る感がある。その中から横綱の一人や二人位は選り出せないことはない、之れを明かにいへば他の實業界の横綱に比して敢て遜色のない、極めて有力なる人物を選り出せば、南海のお酒利德利だと言はれてゐる、根津會長、寺田社長は即ち横綱である。

根津君が膽力宏量を以て優つてゐる。寺田君は偉略學識を以て人に知られてゐる。根津君は膽の人、量の人、寺田君は智の人、之れ位に兩者の鹽梅配劑の甘く整ふてゐるは業界に稀でないか、根津君は倘し藤原藤房なれば、寺

田君は楠正成である。かくして兩者の親善なる事といふたら、丸で管鮑も嘗ならない、實にゴブテンとブライーとの間柄である。

中大兄皇と藤原鎌足の關係を見るやうだ、南海は此二人によつて燦然たる光輝を放ちてゐる。

兩君は南海の爲めには確かに山の上の城である、光りである、地の鹽である、もしこの二人を南海から取り除いたならば忽ち暗黒である。否管に南海計りでない、我關西電鐵界から此二人を取り去らんか、矢張り寂莫である。眞に兩君は業界の名花である。

片方が量の蘆山的なる蓉峰的なる、片方が才氣の噴水的なる飛瀑的なる、一は洞達襟度を稱せられ、一は霸氣滿漲を以て鳴る。

六五

有體にいへば寺田君は少なくとも飛將軍的である故に攻城野戦の功は寧ろ君の得意とする處である。之れに反して根津君は帷幄的である。君は如何なる場合にも急先鋒の人でなくとも大本營付の人である。而してその器量は慥かに統監の値打がある。更に寺田君の學究的なる、根津君の實際家的なるその才、その學、その識は各々用ゆる所によりて長短厚薄は免れぬのであるが兩君の人物を平均せば殆どその優劣を判するに於いて苦しまざるを得ない、私は南海の爲めに此二人物を得たものを賀するものである。

而して兩君の抱負、希望に甚だ大なる異日の造詣や大いに見るべきものがあるかと思へば尙更の事である。私は唯單に南海とのみ言ひたくない、我財界の爲めにもかゝる偉人物を得たのを賀したいのである。

大阪財界對根津氏との

偉大なる調和者寺田甚吉君

昭和八年二月突如として前取締役兼技師長後藤佐彦君が技師長の解職に端して根津君に對して社會は多大の疑惑を有し、根津が東京では財界の大立物なんて威張つてゐるが、大阪では殘念ながら少しも羽振りが利かないから大阪に足場を造るには南海を乗取るのが一番捷路であるから後藤を血祭に上げ次いで岡田社長、中山專務と云ふ段取で序々に改革の美名の陰に隠れて彼が多年の野望達成せしめんとする陰謀であるに盛んに非難攻撃を加へ、又言論機關も極力君を排撃した、そのここの真相は別として確かに反根津熱が熾烈

であつたことだけは事實である。露骨に云へば大阪人は君の大阪入を左様に歓迎してゐない事は明である。

此不評判の眞ツ最中に君が我寺田甚吉君の人格、識見、力量、手腕を激賞して九月二十八日の總會直後本社に於いて開かれた重役會の席上に寺田君を推薦した、他の重役諸君も亦寺田君の人物と認識を深めてゐたから從來の貫例を破つて選舉を行つた。開票の結果絶対多數を以て寺田君が當選したのである。

寺田君が社長就任以來、機會有る毎に根津君の眞意を審さに傳へ、大いに同君の爲め辯護に勉めてゐる。故に根津君に對して誤解を有してゐた人達も最近では全く氷解して今日に於いては反根津なんご云ふものが殆ど其影を沒

してゐる。好漢寺田君こそ將しく大阪財界對根津君と之が偉大なる調和者である。

四千の従業員に心の糧を贈る

會社の利益の増大、乗客に對するサービスには先づ恵まれぬ、従業員に心の糧を贈らねばならぬと、寺田君が平取締役時代に金壹萬圓を會社に寄贈した、會社が此壹萬圓を以て寺田賞として勤續及び精勤な従業員を年々表彰してゐる。人が金のみで働くものでないが、君の此の慈仁に對して四千の従業員は感激してゐる。彼は此の寺田賞創設以來前途に洋々たる希望をその心底深くに宿してゐる。

希望は神である、道である、苟も一度これを有するや白刃前に閃き、水火の難が背後に迫つて断じて恐るることなく、ア、幸福な南海従業員はこの希望を有してゐる。彼が希望の前程には彼等の希望的光明によりて彼を更に幸福なる運命の大道に導くものである。南海従業員諸君また須からくこの寺田賞に向つて馳突すべきである。

真正なる實業家 寺田甚吉君

實業家の尊ぶところのものは内に高遠なる事業上の理想を有し、外には之れが實行に努むること共に社會公益の爲めに終始し而してその志操の堅固不拔なる所にある。

斯くして始めて眞の實業家と稱することが出来るのである。蓋し實業家に事業上の理想、抱負なくその日暮しの行當りバツタリの實業家は恰も船に羅針盤なきが如く何等の用も爲さざるのみならず、寧ろ國家社會に害毒を流すものごいはねばならぬ、實業家の腐敗、事業界の廢亂は總てこの種のデモ我利我慾一點張りの實業家が世に多い結果である。

而かも實業家と稱して國家經濟界を安定し國民の生活を指導せんとするに至つては危険之れより甚だしいことはない、然りわが國の實業家と稱するものが皆この有様である。

されば現在の實業界は腐敗に腐敗を重ねて破廉耻と無能と我利我慾の集團として國民より輕視されてゐる。

此秋、此際この猛火の中に燦然として明星の如く輝くのは財界の新人寺田甚吉君である。現在我國の鐵道界を觀るに依然として社會公共心なく、依然として會社本意個人主義の弊を脱却せず、而かも社の主腦者は、藝妓買ひこ女社員と醜關係と空威張りと鍍金細工の俗臭紛々たる不謹慎極まる人物が羽振を利かす斯界に一輪の名花として君臨するのは我が寺田甚吉君である。

君は南海鐵道社長と言ふ肩書は名譽の表章なりと思惟する榮冠よりも寧ろ君の人物そのものには一層大なる輝きが潜んで居る。蓋し實業家は必ずしも君の占有物にあらずして他に幾萬の實業家がある。

况んや肩書その物は必ずしも名譽の源泉なりと限つたものにあらず、反つて之れが爲めに人生の意義を没却して顧みぬ實業家も多い世の中である。天

下の大實業家もまた時には天下萬人の嘲馬の標的たることがあるではないかされば電鐵會社の社長たるもの必ずしもその人物を褒貶する標準とはならぬ唯社長にして社長たるの本分を解し、その使命とその職責を辱かしめぬといふ社長に於いて始めてその人物を稱すべきである。

社長にしてその本分を盡し實業家として國家に對しその義務を全ふするといふことは固より當然のことで之れを以て特にその人物を稱揚するには足らぬ。而かもこの當然のこゝを全ふするものが甚だ少なきを思へば實際世の中に否近代實業家に人物の少なきこゝ知るべく随つてその當然のこゝでも之れを全ふするもの偉い人間と謂はねばならぬ。况んやそれ以上のこゝを爲すものに於いてをや。

一體我國の人は會社の社長になるこ人間は總て凡化するやうな傾向がある是れ、蓋し悉ゆる權力を充たし得る地位にあるを以て自ら安逸に耽り、漫心し或は社會的地位を利用し自己の營利のみに汲々として殆ど他を顧みるの餘裕を有するものなく國家の爲め、社會公共の爲めなどいふことはその念頭に起らぬものである。随つて益々凡化し増長し威張散らすのである。

今ま寺田甚吉君を観るに君が社長としてその地位は固より南海電鐵に於いて首腦者として大なるものである。

けれども君は肩書そのものを左様に利用しない否悪用せない、飽迄、人間寺田甚吉として如何なる場合、如何なる場所、肩書に依つて仕事を仕様なんてのケチ臭い、さびしい心掛は毛頭ない。

君はこの生存競争の激しい社會、競争、衝突、角逐の斯界に起つて赤裸にて奮闘し、而かも君は露骨で活動してゐる。君は會長に依らず資本を借らず他の實業家のやうに先輩や社を利用し否、依らない、先輩や社を利用するものは自己に活動の實力なき者であり、自己に信念なき者である。

君には迎合の意なく、君には虚偽の念なく、偽善なく阿附追従の意志は毫末もなく唯だ君の頭にはヨリ一層國家社會産業立國本位と麗はしき觀念が充滿してゐるのみである。

随つて多くの斯界の人々が氣息奄々として或は唯だ己の地位を利用して私利私慾に汲々として殆ど社會を顧みるものなき時に當り君は國家を思ひ、社會を考へヨリ良きグレット南海鐵道建設の高遠なる理想、遠大なる抱負を迪

つて一面實業家としてその人物は絶へず向上して止まぬといふことが解るであらう。即ちその人物は君の名譽財産よりも遙かに以上であることが判る。尚ヨリ一層切實且つ具体的に君の人物に就て評論するの自由を得さしめよ。物に利弊の伴ふが如く人にはまた、長所もあれば短所もある。這は如何に英雄、豪傑でもまたは大人物でも到底免れぬところである。

今ま寺田君を観るに君は頗る長所に富んでゐる、君に親しむるもの君を評するもの言を聞くに唯だ寺田君は偉い人だといふ。何が故に君が偉いかと問へば君は社長なるを以て偉いといふに歸するやうであるが、之れでは毫も偉いといふ理由にはなつてゐない。常眼凡腦を以て到底人物が判るものではない、私を観るには君は頗る常識の發達したる而かも會社經營には天才的の鬼

才を有する實業家で一言一句國家産業と國民の福利増進の實に花も實もある近代人の要求する實業家にピッタリ適つてゐる。

元來社長なるもの經營の才能や威力ばかりでなく魅力もまた必要である。斯の英雄、豪傑が婦女子に對して一種の魅力を持つやうなもので會社が乗客に魅力を持つのは會社の生命である。魅力といふいかにも神秘的に聞えるがそれは要するに乗客に「充たされないものが充たされる」といふ望みを抱かせることである。

君が確かに乗客に魅力を持たせてゐる、客が君に魅力を持つことは即ち南海電鐵に魅力を持たせることである。それは恰も戀する男女が神秘的魅力を持つてゐるやうに戀愛至上のものは男女互に正しく相識ることだといふこと

同様に最上の乗物は客自身が自分達に乗心地良き交通機關に魅力を持つ南海電車の強味がそこだ、君及び南海電車の場合は神秘的の魅力でなくして合理的認識に基くもので乗客と會社は逆上した變態的戀愛でなく愛すべき所以を自覺しての戀愛である。

常識の發達したる寺田甚吉君

實業界は嚴格なる意味に於いて常識の戰場である。實業界に常識を要するのは恰も軍隊に大砲、小銃、機關銃、彈丸、砲車、軍馬、軍艦、水雷艇、潜水艇、飛行機などを要すと同一である。

單に今日とはいはぬ、孰れの時代にも常識の發達したる人が必要である。

就中今日の如き經濟界非常時には切にその必要を痛感するものである、所詮實業界非常時の犠牲者たるべき實業界の偉人物は吾人に向つて常識の發達を教へ、鍛練を教へ、應用を教へ、更に効果をも教へつゝある。

實業家に取りて常識はパンよりも冷泉乃至衣服資本よりも必需品の一である。實に實業家の常識は大資本である、大才能である、大建築物である、更に大信用である。常識の前には、資本、建築物は恰も軍艦の前の鰈の如くである。

君は本邦電鐵界に於いて最も常識の發達したる實業家として電鐵界以外にも大に羽振を利かしてゐる。

君は必ずしも崇高神の如き人格者でもない、左りてまた非常に大學者で

もない、その才能、見地、手腕を見るに必ずしも多くの人を驚かすほどにも見えない。有体にいへば一見、一個の平々凡々の人のやうに見受られる。

然れども君には慥かに一の天品がある、何人も斷じて追隨を許さぬ美點がある。即ちその發達せる常識である。君の熱誠、君の奮闘、君の絶倫なる精力は、この常識の發揚から轉化したるものである。

君が南海の社長として、同社の爲めに不屈不撓、銳意之れ勉めつゝある南海鐵道の經營の現實は移つて君の常識を遺憾なく發揚してゐる事が窺ひ知られる。更にまた發達せる常識を有する君の口より出づる言葉は數千人の社員従業員を活かし、また濟ふの力がある、宛かも天來の福音のやうに……

而し君は必ずしも人を濟ふに足るほどの言を以てゐる人でないかも知れぬ

が、然れどもソコが發達せる常識の力は格別である。故にその言には、無理がなく、片手打がなく、極めて誠心誠意を披瀝したがハツキリと見ゆる。随つて君のその言葉には眞理を含まれてゐるのである。

常識の人は何事も自己の常識から割出した議論よりせない、デあるから、その議論は直である、正である、牢強附會な處がない。況んや烏と鷺と胡魔化すをや。

公平な議論と眞理ある言語には敵はない、宛かも仁者の敵のないのと同じである。業界にも君以上の財産家もあればまた地位學問のある人もあるが、この點に於いては尙一點の疑ひなき人物は甚だ少くないが君は特有の發達したる常識の美點がある。

力の人 寺田甚吉君

八二

當方本邦電鐵界で先づ手腕家なる者を求むる場合には名望隆々たる老成社長級に於いてするよりも寧ろ新人社長級の人々にあつてその多くを得らるものである。

老社長級の人々等は所謂多年經驗と社交上の信任とこの二點を以て兎も角も一社もしくは數社の管理者として専務、支配人の人々を操縦して居るのである。けれども夫れが決して能くやり切るに云ふ手腕の力でなく、その勢力の過半以上は彼等に餘儀なく追隨し若しくは彼等の下にあつて業務を擔任せる人々の術中に因るものである。

だから單に電鐵界の手腕家といふ場合になるに最も多く實務に當つて居る新人社長側に於いて求めねばならぬ事になる。

之等の人々の間に於いて現今尤も巾を利して居るは、我が寺田甚吉君を擧げねばなるまい、君は實際素養もありして隱然重きをなして居る。

君の財界のその潜勢力は大したもので、老成な社長株もごても及ばず、實際の勢力と云ふたら實に大なるものである。かくして君は我が電鐵界に於いて電鐵界勢力圏を三分して完全にその一を保つ巨人である。

君の力量と手腕を信じて居る、雷老爺のニツクネームを有する根津會長は君の爲すことに於いて、一言半句の文句を云はない、一切合財社務を任せてゐる。南海の一切の權限は君にあつて而して夫れをテキバキと小氣味よく片

八三

付てゐる。

根津君が會長に就任するや世間は寺田社長は看板社長である、南海の實權が根津にありなんての風評もあつたが、事實は之に反して決して根津君が寺田社長のする事に一切干涉しない、一切任せ切りである。

故に君も根津君の意氣に感じてゐる、人生意氣を尙ぶ男子亦知己に感ずるである。會長が自分を信じてゐるといふことは大なる知己である、この知己に對して酬ゆる所以の道は精力の傾倒にある。粉骨碎身にある、滿腔の誠意を捧げて社務に當るにある。

君は益々愈よ知己の感を深めて行く、縦し身を千々に碎くとも辞するところでない。

有體にいへば、君が社長に就任せらるや一部に多少の反對のあつたことは事實である。夫等の心よこせざる輩は白面の小僧、何者ぞと攻撃の矢を放ちたこともあつた。君がこの不遜の言を耳にするや、君の持前の興奮的彈力君特有の負けず魂がムラ／＼と持上つて、フフン、今に見て居れと一層馬力をかけて身を以て南海に殉ずるのが社長たる俺の本色である云ふ信念が猛火となつて君を發奮せしめた。爾來滿身の精力を傾けて社務の刷新を謀ると同時に他面に於いて全渾の智力を振起して幾多の情弊を剪除した。

君は金持の坊ん／＼に稀らしい意氣の人である。渾身總て之れ意氣を以て成れる人である。故に君は如何なる場合に於いても亦如何なる人に接するも君は何處迄も物を呑み、時には事業迄も呑んで掛るのである。

豪膽、君の勇氣、而して君の事業に對する執着力は全く、このエネルギーはこの意氣の發動し來る結果にして、而して君の意氣は理性と調合して自信力と配合する。君はこの最も鋭敏なる原動力によつて、先づその發揮點を得たるものにして斯くして君は更に強烈なる執着力、精力主義を以て終始する人である。

君は既にこの執着力に富む、縱令如何なる難問題に際會するもドコ迄もその進行を續け貫徹を期する人である。故に全株主は寺田社長の如きは株主の方から低頭平身手を合して資本の番人に頼まなければならぬ、何んこなれば株主たるものは自己の資本の一日も有利に且つ安全に活動することを切に望むものである、實に寺田君の如き人に托すればこの目的が完全に達するが故

なり。

人間の信用もこゝに到りては人以上神に近きものである。實に君が南海を思ふ至誠、而してまた株主が君を愛する全幅の至慕は、兩々相感應して、勢ひ膠漆ならざるを得ない、君の將來は少なくとも南海の柱石として起つべく運命の神は君を手招きつゝあるものである。實に君は好愛すべき善人努力家である。善人良夫の心には誠實の神が宿り幸福の神が見舞ひ給ふのである。好漢甚吉君たるもの一層忠勤を勵みて可なり。

祖先崇拜と郷土愛

八八

大日本帝國皇帝陛下　は全民族の光で在らせられ、全世界の光りで在らせられる、全民族をして大日本帝國の光徳を讃仰せしめなければならぬ。

人民を大御寶と呼び給ふ御氣持、民の竈の煙繁きに宮居の荒廢を忘れ給ふ御氣持、高貴の御身を國難の前に投じさせんと決意され給ふ御氣持、この聖明の大恩に浴する我等國民こそ萬國に比類なき難有き幸福な國民である。

御至高、御至仁、御至徳にまします、天子様を戴く我國に數千載忠孝と祖先崇拜の二大道德と思想が嚴然として輝やいてゐる。

我國には幸にして皇祖祖宗を帝室で御祭り十分祖先崇拜の御趣意が整つて

居る上にわれら全國民もまた祖先を崇拜して居る。

國民にして或は國家の爲めに大功のあつた人といふものは一家の祖先とするばかりでなく國の爲めに盡した人であるから國の祖先、皇祖皇宗に繼だころの國の祖先であるといふて日本國民が一般に崇拜しなければならぬ、左様な人に及ばん人であれば皆一家の祖先、また之れは一家で崇拜する、一家でもわれら今日ある所以は即ち祖先のお庇であるから矢張り一家の祖先を崇拜しなければならぬ、その崇拜するに云ふのは唯崇拜して難有がるといふただけでは無意義である、祖先の恩を享けたのであるから、その祖先の恩を謝するのみならず、祖先の業を擴め行き、祖先が十の事をし置いたら子孫はそれを百にも千にも萬にもするといふここてなければなら

ぬ。實に親の恩は、富士の高嶺の如く、千尋の海の如くである、親は千里往くとも子を忘れずである。

君が、東洋の電鐵王、南海鐵道株式會社社長、本邦紡績界の巨星、岸和田紡績株式會社社長、我電力界の權威、大同電力株式會社取締役、其他十數社の頭取、社長取締役の重任にありて、身に寸刻の餘裕も與へない、繁激貴重な身でありながら、君に喜びのここあれば必ず父母の墓前に額づいて報告し、中元には先づ自ら墓掃除をしてゐる。前賢の格言に「追孝は愛の負債の償還なり」は君の爲めに貽されたともいひたいのである。

斯の如く非常に多忙に拘らず、常に岸和田と往來して、市の爲め、人物養成の爲め總ゆる指導啓發をされてゐる。實に君は當代の師表であり、後世の

軌範である。われら泉州人は愈々君の盡孝報恩の大精神と盛徳を欽仰して止まないのである。

至誠を産む優秀なる

天資豊かな 寺田甚吉君

君が大膽にして、而して細心、聰明にして、而かも沈毅、視達にして、而かも宏量、先見の明、着眼の鋭、飽く迄大事を遂行するといふ勇氣と苦節を備へ苟も一度劃策したる事は中途にしてドンナ障害があつても敢行せねば熄まぬといふ、いとも頼もしき生きくした精神をその渾身に漲らしてゐるは寺田甚吉君である。

また至つて平和な人である、而して極めて徳素を重んずる紳士である。その誇らず、その衒はず、威張らず、非義を悦ばず、非禮を行はない所謂君が篤實、篤行のうちに人を愛するこいふ美德がアリく、現はれてゐる。

君が人に勝れたる、愛國の熱誠もまた、善事に向つて敢爲邁往の美質も至愛至仁の美德から轉化した處の醇汁に過ぎない。「古人は愛を以て衆徳の最だこいふた」愛は何故に夫れほど尊いのであるか、愛は不朽的のものである。愛は決して改易的のものでない、之れと同時に愛は絶対的のものである。更に不變的のものである。

天地は壞はれ人類は滅びても愛は決して壞はれない滅びない、ソノ如く至愛至仁の人は不朽の人である、不變の人である。

また平和を好む人は愛の至情の溢れた人である。如此の人はドンナ場合にも餘裕がある、恒に心が平らかである。

君は樂に居ても苦に處しても仕事の時も遊ぶ折も食事の際も、若しくはまた朋と語り、人と談ずる間にもコセ付かないで應揚な何んもなく靜かにユツタリこした處がある。

而してかゝる人こそ果してその容貌に至るまで寛厚の同情と平和の波を湛へてゐる。而かも君は確かにそのタイプの一人ではないか、然り寺田君の容貌は恒に平和の波を漲らしてゐる。

甚だしく自得したる人間として満面悉く之れ平和の神が旅宿、宮殿のやうである。福澤桃助氏が嘗て私に向つて君を評して曰く

寺田氏は人物も大なれば随つてその器も大である。氏が胸中恒に無限の平和を湛へて紆徐迫らず、綽然として餘裕のある處などは現代青年實業家としてまた本邦電鐵界の第一人者である。而かも氏が平和の源より湧沸する無限の愛嬌はまた驟然掬すべき風趣がある。之れ決して他に匹儔を見ない氏の天品である。

然り福澤氏のいふが如く君の平和と盛徳は君の天品であるが故に自然である。君は決して平和を衒ひ有徳を虚飾するの人でない、君は此の點に於いて確かに萬人に超卓せるものである。

日本の富豪は富の乞食、權力の暴行者、富の囚奴、權力の非道者を以て得意然としてある傾むきがある。即ち彼等の懷中は恒に豊かにその倉庫は財産

を以て盈たされつゝあるも、彼等の心には平和が宿つてゐない、至樂の何物たるかを解せない。

君は世の亞流の實業家と大いに撰を異にしてゐる。君は慈善と公共と國家の爲めには喜んで金錢を捐つるの義心もある。而かも此の義心は絶へず君の肺腑を燃やしつゝある。

君の理想は實業家としてその本分を出來得る限り國民の福祉の爲めに竭したいといふにある。之れを詳言せば君としては實業家が後世に遺すべき土産として、その職責を完全に果しヨリ良き國家を建設したのである。

更に換言せば後世に傳へて以て燦然飾るに足るべき一大土産を遺物としたといふにある、實業家の最後の目的は宛かも澁澤榮一や岩崎彌太郎が實業

家として國家に功績を遺したと同一である。君は慥かに此の理想の一人ではあるまいか。

君の資性は率直にして剛毅、人に對して城俯を設けず、また能く人を愛す君が如何なる微賤の業に従ふ一労働者に至るまで會へば必らず懇懃禮を返へす、曾つて私は或時、君に『是れ君が人望日に隆き所以也』と言へば君は笑つて曰く『何も吾輩は彼等に向つてお世辞をいふ必要はないが、さうかと言ふてお世辞する位で人心を收斂するここが出来るものでない、吾輩は只人間として禮を返すに過ぎない、彼も同じ人間で、人間である以上互に相當の禮儀あるべき筈である』

然り君が如何なる場合にも『人間本位』若し鍍金細工の俗臭粉々たる實業家が亡びたる時は正に寺田甚吉が太平を謳歌する時であらう。私は君の人格を推賞す、君は飽く迄大にして慈眼仁腸である。

君は我電鐵界の一輪の名花として燦然煌々として一茫萬里を輝やかす宵の明星たらんここは獨り私の祈るところばかりでなく、恐らくは一般國民もまた之れを祈らしよこは之れ天來の聲である。

苟しくも君をして此の聲を發せしむ、之れ實業家として其天職と義務を果し本分を竭すに於いて遺憾なきを致すからではないか、君が異日の大成を私に期してゐる。その日常生活は極めて清楚である、而かも君の胸裏萬斛の平和を湛へてゐる。

君が神心晏如たる所以は畢竟前途に洋々たる希望をその心底深くに宿して

あるからである。

君に就ては猶詳しく論ずべき點が多々あるが、君の眞面目は如上の評の中に悉されてゐるだらうと信ずるから此位で筆を擱くして此際一言附言したきことは君の高遠なる理想、偉大なる抱負、その義心を今日直ちに實現さすことは慎重なる君のここであるから不可能であるかも知れないが他日必ずあることを私は信じて疑はないのである。

端麗貞淑なる寺田富江夫人

此の如く夫君は多忙の躬を以て猶善く篤敬の心を充たす、而して其家政の如き措いて殆んど問はざるもの、洵に其繁劇多忙の遂に之が暇なきが爲なりと云へ、然れども君をして全く之を放任して顧みず、而も安んじて一念専ら國家的事業に従ひ、若くは他人の事に盡すを得せしむる所以は、抑々内助經營の其人有りて、君をして更に後顧の憂なからしめたるに依るものである。

端麗貞淑なる富江夫人の如き眞に是婦人の典型善く内助の範を垂れたるものご稱すべきである。

富江夫人は大阪の名家、我國の金庫王松山與兵衛氏の第三女ごして、明治

三十四年四月二十五日、大阪市東區南久寶寺町四丁目に初めて此の世の光りを見たのである。父君與兵衛氏は華城實業界に於いて人格崇高と慈仁と其家の由緒正しきを以て有名であり、且つ斯の難工事を以て有名な高野鐵道を創立して功勞あり。根津嘉市郎氏とは兄弟も音ならぬ間柄である。

夫人は頭腦頗る明晰にして理智に富み、清秀婉麗なる容貌、從容閑雅な優姿は不知不識の間に世人の崇敬愛慕を受くの天資、加ふるに非常に學を好み大阪府立清水谷高等女學校に在る頃より常に拔群の成績をあげてクラスメートの羨望の的となつてゐた。天が夫人の靜修、不屈の勉力を嘉納せられ同校を首席を以て卒業せられ、卒業後は嚴肅なる家庭に在つて古今の婦道一切の修養を積み、芳紀二十三歳を以て天下の富豪寺田甚吉君と岸和田の本邸に於

いて華燭の典をあげたのである。

夫君に仕へては常に從順なる補助となつて内助の功至らざるなく、その間よく子弟の薰育に努めつゝ、天下の富豪の本分を守り、公私多事の家務を巧みに處理して些の遺漏がない、而かも夫人は謙讓の美德を備へて富豪の奥様の通有性たる驕奢の風は毫もなく、深く慈愛の念に富み、世の薄倖者に憐愍の情を盡して富豪の奥様としての其本分を完全に果してゐる、實に有閑マダム
の龜鑑として令名あり。

郷土の賢弟

1011

集むるに勤、積むに儉を以て善く、其財を殖した故甚與茂翁は又決して尋常一様の吝嗇慳貧の富豪にあらず、拾ふべきは拾ひ、捨つべきには捨て、一代に巨富を成したる故人に吾人は心から敬服するものは其富にあらずして實に兄弟十指の如き優生兒を育み上げて置かれたことは無條件にて敬服するものである。

世の富豪の家に生れ其恩澤に浴するものを見るに、放肆に流れ豪奢を事とし父祖の膏血に成れる家産を蕩盡するか、然らざれば鄙吝陋劣、徒らに其遺産を死守して利用厚生之道を知らず、或は遺産を中心に兄弟が血で血を洗ふ

の愚を敢てし以て世の嘲笑を招くに過ぎざるものが甚だ多いやうである。

けれども寺田家の兄弟は人格、手腕、識見力量に到るまで寸分の隙きのない全く文字通りに酷似し、而して其の兄弟愛の如きも又他に見らざる麗はしきものありて、兄は弟を慈愛し、弟は兄を尊敬し、實に兄弟十指の如くである。

蓋し此の青年紳士の典型的たる優生兒を遺された、これ故人が如何に偉大なる人格者であつたかと言ふことが窺ひ知られるのである。

和泉銀行頭取 寺田吉之助君

君は明治三十四年三月生泉州第一の信用を有する、和泉銀行頭取である。

由來銀行業の基礎は信用にあるは勿論、信用を得るの途は頭取の人物如何にあり、世人が首を掛け替への大切な財産を預託する處であるから必ずや一般に注意しつゝあるは勿論である。

君は天資、聰明にして頭腦頗る明晰、溫和恭謙にして名利の爲めに一事一物決して苟もせず、人に接し事に當り、掛引きなく、術數なく一言一句其語は肺肝を衝いて出て來らざるは莫く、君を一言にして評すれば徹頭徹尾、誠意の人である。

我國の銀行界には君以上の財産家もあれば亦地位學問のある人もあるが、尙一點疑ひなき人物は甚だ少くない、然るに君に一點申す分なき好個の銀行家である。

岸和田紡績株式會社取締役

寺 田 榮 吉 君

君は明治三十五年四月生、令兄甚吉、吉之助君等に酷似して天資、敦厚眞卒、舉止端凝、一舉一動、苟もせず、風度凜々犯す可からざるものあり、而かも人に接すれば一見舊知の如く毫も驕り侮るご云ふ風はない、又ごこごなぐ他に見るべからざる悠揚迫らざる美點を具へ眞に温情掬すべき好青年紳士である。

岸紡中に於ける最年少重役たるに拘らず、多くの社員、労働者から多大の尊敬を享けつゝあり、前途洋々たる君のこごであるから必ず近き將來に一大飛躍の期が必到するであらう。

農 學 士 寺 田 甚 七 君

一〇六

君は明治三十七年七月生、名利に超脱して一意農學に志し斯學の爲没頭し學界の權威として令名藉甚たり、最近に令兄甚吉君と共に泉州に於いて一大農園を經營し多年究めたる學術を實地に應用し、行詰れる農村問題解決の指導者たらんごしてゐる。

昭和十年十二月二十日印刷
昭和十年十二月二十五日發行

(非賣品)

著 者 原 靜 村
大阪府岸和田市沼町一八五番地

發行兼 印刷人 原 德 太 郎
大阪府岸和田市沼町一八五番地

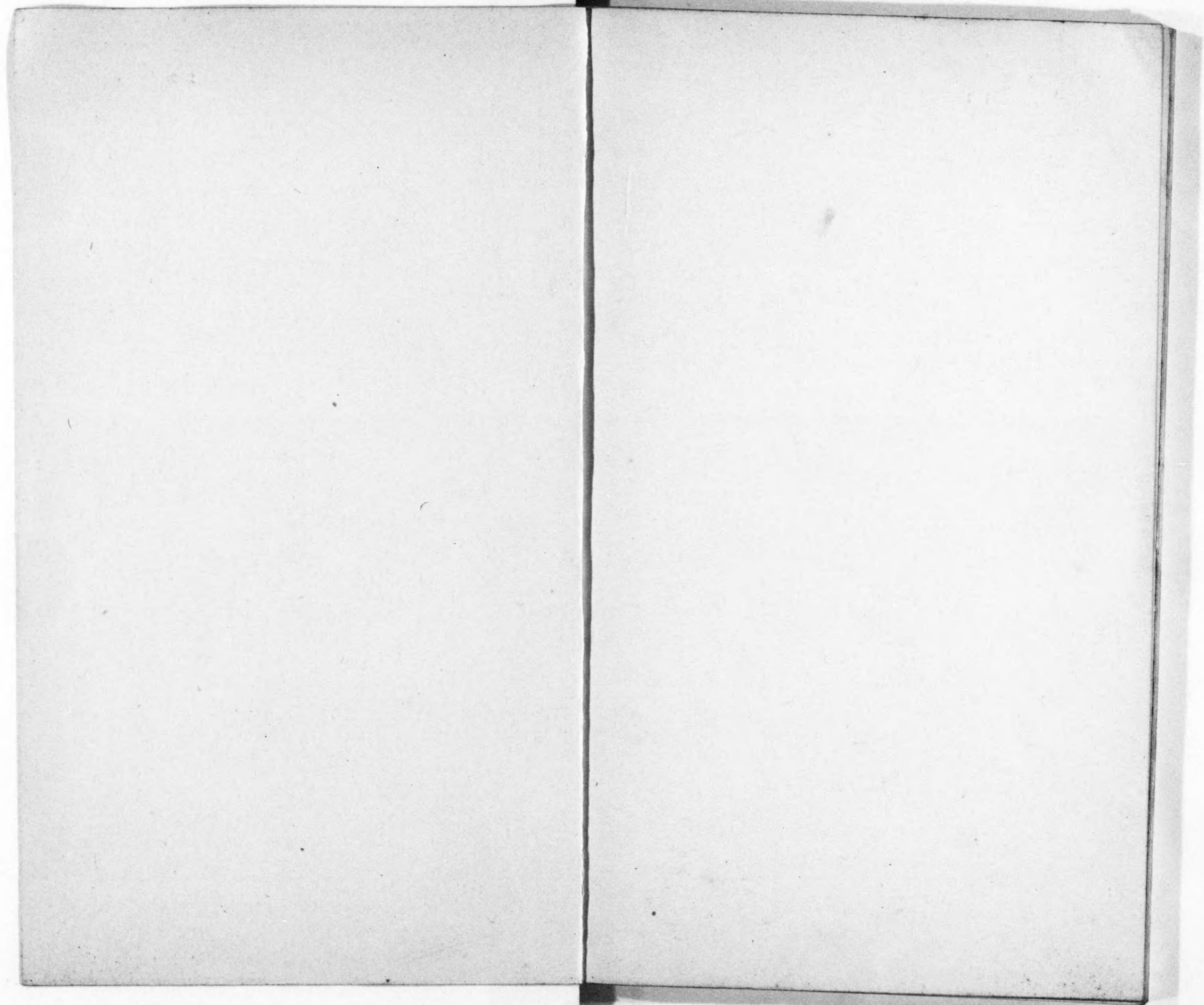
印刷所 南 海 新 聞 社
大阪府岸和田市沼町一八五番地

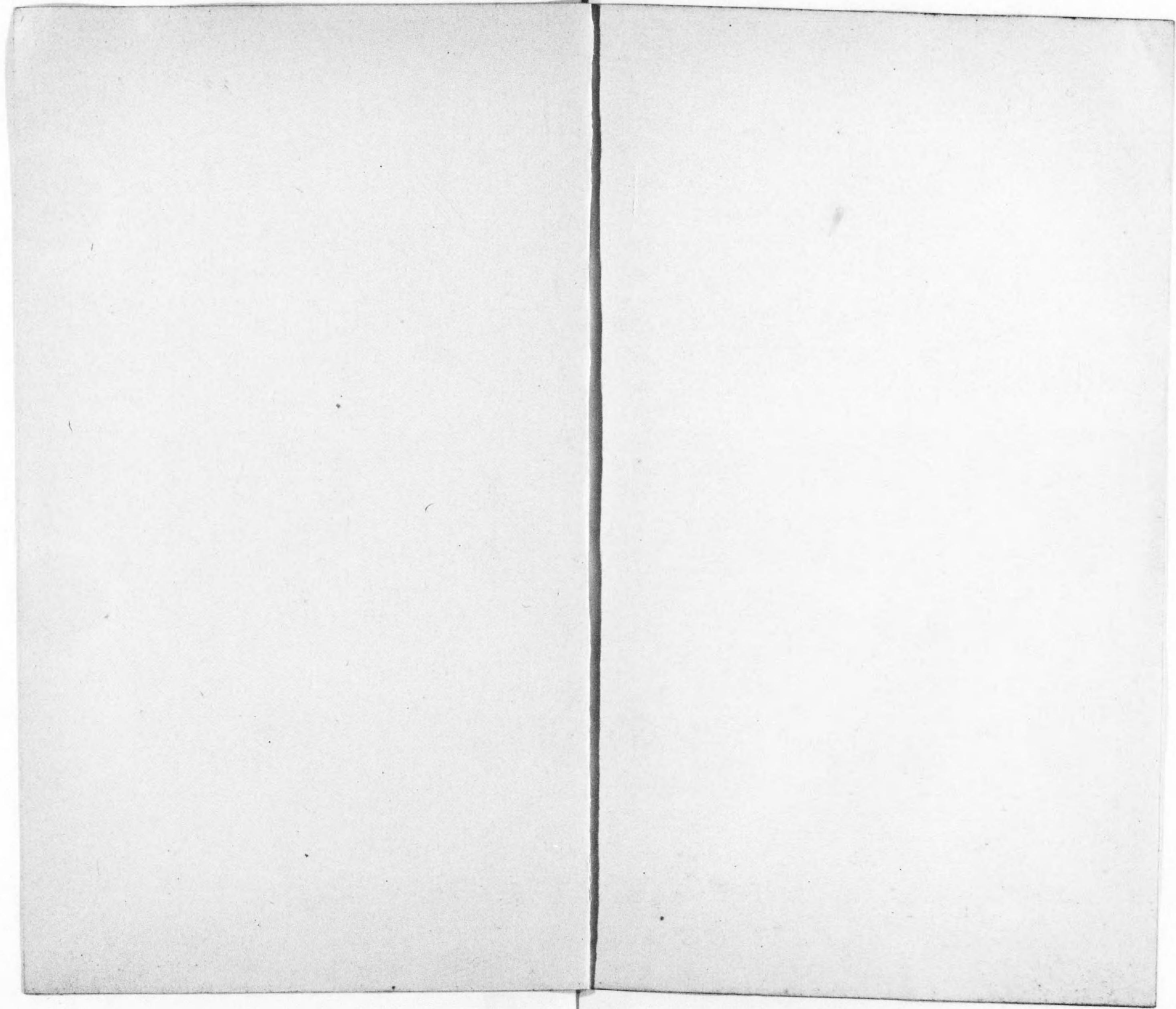
大阪府岸和田市沼町一八五番地

發行所 南 海 新 聞 社

複	製
嚴	禁

(載 轉 禁)





終

